
学園黙示録と古しえの鉄の巨人

ガンダムマイスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録と古しえの鉄の巨人

【NZコード】

N2048W

【作者名】

ガンダムマイスター

【あらすじ】

ある日神の手違いで死んでしまった主人公「秋月淳」は学園黙示録の世界に転生をしてしまった。だが淳は神様に能力を貰い 奴らと立ち向かう!さらに原作キャラも神からチート能力をもらいます。チートが嫌いと言う方は戻るを押してください。

プロローグ（前書き）

初めての小説ですが頑張っていきます。

プロローグ

「すみません！私はアナタを間違えて死らしてしまいました！」

俺が目を覚ますと目の前で土下座して謝る一人の美女が居た。
てゆーか俺が死んでる? なに言ってんだこの人は?

「私があの時カッターナイフを地上に落としてしまいアナタに当たつて死らしてしまいました」

「えーと何がなんだかわかんないんだけど。ふと下を見るとそこには俺が居た。いや正確には腹に大きな穴が空いていて周りは血の海が出来ていた。

「…え？ 驟？ マジで俺死んでるのー！？」

「はい、本当にもうあげありますんで」

マジかよ……、じやあ俺はどうするんだよと思つてゐる。

「この責任は私がします。アナタを転生で生き返さしてあげます」

転生でまた唐突だなあ。
まあ生き返えなれるならいいけどな。

「それでアナタはどの場所に転生しますか?」

「それじゃ、学園黙示録でお願いします！」

と俺が言つと神は。

「そこでいいんですか？あそこは死亡フラグが満載な場所ですが？」

「ええいいんですよ」

「…ええわかりました。ではアナタに力を『えたいんですけど何にしますか？』

と神が聞いてきたので俺は。

「それじゃまず俺が『アルトアイゼン・リーゼ装着！』と言いつとアルトアイゼン・リーゼの装甲を装着できるようにしてください。あと装備はアルトの固定武器の他は両腰にシシオウブレードを2本と射撃武器は〇〇ライフルを左手に装備してソリッドソードブレイカーを両肩に装備、さらにスラッシュユーリッパーを背中につけて全ての弾数は無限でとHンジンはGNドライブと時流エンジンとオルゴンクラウドあとラムダドライブとP.S装甲もお願いします。あと身体能力はすべてMAXでさらにSEEEDも使えるようにしてください」

「すいぶん要求してきたわね…（汗）。まあいいんですけどそれではアナタを転生しますが他は何もありませんか？」

「それじゃ…、転生したらすぐに原作開始する時間帯にしてください」

「わかりました。そこでは行つてらっしゃい」

そう言つと俺の目の前が真つ白になつた。

第一話 地獄に舞い降りた古しえの鉄の巨人（前書き）

クダクダかもしれませんのが読んでもらえれば嬉しいです。

第一話 地獄に舞い降りた古しえの鉄の巨人

俺が目を開けるとそこは私立藤美学園の屋上だつた。時間を見ると原作開始まであと数分といつといつだ。

「さて今の内に能力を使ってみますか」

「そう言ひと俺は。

「アルトアイゼン・リーゼ装着！！」

そう言ひと俺の周りにリーゼの装甲が現れ俺の体に装着された。俺は少し自分の体を見てみるとちゃんとゆつたとうりの装備をしていたので「よし、これで大丈夫だ」といい装甲を外すと校門の方から悲鳴が聞こえてきた。原作が始まつたようだ。

「さてと、それじゃひと暴れしますか！」

そう言ひと俺は学園の中に入つていった。

学園の中を走つていると一人の男子生徒に会つた。

「！…あんた誰だ！」この生徒じゃあないみたいだけど…」

今、目の前にいるのは確か森田？だつたよつな？一応名前は言つておくが。

「俺の名前は『秋月淳』だ。ちょっと学園の中に来たんだけど…と名乗つていると向こうから 奴ら が来た。

(うつ、もつときやがつたか)

と言つてゐると森田が。

「 … おいあいつ怪我してゐるじゃないか！？早く助けないと… 」

そう言つて森田が駆け寄ろうとするのを腕を掴んで止めた。

「 おーつー何にすんだよー！？」

「 バーカ、良く見てみろ 」

俺にそう言われ森田が良く見てみると顔色を真つ青にして。

「 ……！？な、なんだよあれー！？」

と氣付いたようだ。今こっちに来る生徒のよつなものの首の一部がなくなつていた。

「 あいつはもう人間じゃねえよ。そしてといきますか？アルトアイゼン・リーゼ装着ーー！」

突然叫んだ俺にビックリして見る森田が驚いた顔をした。俺の周りにアルトアイゼン・リーゼの装甲が現れ身体に装着したあと俺は。

「 もーーて、狩りの始まりだ。行くぜーー！」

そう言つと俺は一気に加速し 奴ら に向かつて。

「 これで終りだーー！リボルビング・バンカーーー！」

そう叫んで 奴ら の頭にバンカーを打ち込むと 奴ら の頭が
ぶつ飛んでいった。

そして頭がぶつ飛んだ 奴ら はその場で倒れた。俺が後ろを見ると森田が驚いた顔をしてこちらを見ていた。

「おい！俺はこれから生存者を探してくるがお前はどうする！」
そう言うと森田はわれりかえり俺の所に来るのを見て一緒に行動すると判断し俺も走った。

二人は連絡通路を走つていると。

「「キヤアアアアアアア」」

「「……」」

一人は悲鳴が聞こえた方え顔を向けるとそこには三体の奴らに囲まれた女子生徒一人が居た。

「ひつ！やだ！」

「」

そう言つも 奴ら はどんどん一人の方向かつている。

「おい！死にたくないならふせていろ！……」

俺は一人向かつて言つと両手にシシオウブレードを持つと加速しての 奴ら の身体を真つ一つにし残つた2体の頭部に一線した。

「おいお前ら、大丈夫か?」

「はい大丈夫です」

「ありがとうございます」

一人は俺にお礼をしてきたので

「いいよお礼なんて。ああそっ言えればまだ自己紹介してなかつたら、俺の名前は秋月淳だ、よろしく」

「私は上条美鈴つていいます」

「私は一木敏美つていいます」

俺が自己紹介すると二人とも自己紹介をしてきた。二人とも俺の鎧を見て驚いた顔をしていた。

「なあ、俺達はこれから学園を脱出のにバスの鍵を探してるんだけど、どこにあるの?」

俺が二人に聞くと

「バスの鍵なら職員室にありますよ。職員室はそこをまがった先にあります」

と敏美が答えてくれた。

「ありがとうございます。君達も一緒に来る?」

俺が一人に聞くと。

「「はい！」

よしり、それじせ行こう

いくと突然。
そう言つと三人は俺の後を追いかけて行つた。
職員室の前まで

Γ. Γ. Γ. Γ. Γ. Γ.

悲鳴が聞こえてきて急いで行くとそこには一体の 奴ら に電動
ドリルを差した沙耶が居た。そこに孝達も居たがその後に 奴ら
が居た。どうやな孝達は後ろに居る 奴ら に気付いてないみたい
だ。俺がまずいと思い一気に加速すると俺が大声で

「全員伏せろ！！」俺の声に孝達がきずいて後ろを向くとそこには 奴ら が10体ほどいて驚いたがさらにその後には急加速してこっちに来る俺に驚いていたがあえて無視し俺は 奴ら に向かって。

「奴らを追い詰めろ……ソリッドソードブレイカー……それゆけッ……！」

「な、!?」

俺の肩にあつたソリッドソードブレイカーをバージすると孝達は驚いた顔をした。分離した8個のソリッドソードブレイカーはまるで意思をもつているかのような動きをして 奴らを攻撃した。さ

らに俺は左手に装備した〇〇ライフルを発射し 奴ら の頭をぶつ飛ばした。そして 奴ら の頭部を破壊したソリッドソードブレイカーをもとに戻して孝達の方え向かっていくと横ら突然 奴ら が現れて俺の腕に噛みついたが 奴ら の歯バキッと音をだして折れた。

「 「 「 「 「 「 「 なにつー? 」 」 」 」 」 」 」

みんな驚いた表情をしたが俺は気にせずニ。

「 だてや酔狂でこんな頭をしているわけじゃない! 」

もう一つと頭にあるプラズマホーンを起動させ 奴ら を真つ二つにした。みんな睡然とした表情をしていたが俺が『早く入つたほうがいいぞ』と言つとみんながはつとして職員室に入つていった。

第2話 全員集合そして脱出（前書き）

急展開なつえにまたクダクダです。

第2話 全員集合そして脱出

俺達が職員室に入るつて最初にしたことはバリケードを作るところだ。俺は近くにあつた冷蔵庫を持ち上げて扉の前に置いた。ふと視線を感じて振り向くと みんな唖然とした表情で見ていた。

（やれやれ、それじゃ解除しますか）

俺がアルトの装甲を外すと装甲はその場で消えたのでみんなが驚いた顔をした。するとコンタクトを外すしメガネにした沙耶が俺に詰め寄つてきて聞いてきた。

「ちよつとあんた！ 一体何者！ 」この生徒じやあないみたいだけど、あとあの鎧は何！ ！」

「確かにキミは！」この生徒ではないな。何者なんだ？

「おつ！ 沙耶だけじや あなく冴子まで。仕方ない話すか。

「やかつた、話すよ。ただし驚くなよ？」

そう言つて全て話した。話し終えるとみんな信じられないといった顔をしていた。

「「い、異世界つて…ありえない」

麗と沙耶が同時にそつ言い孝や森田、美鈴、敏美もマジかよと言う顔で見ていた。まあ信じられないのは当然だ。だが一部の人は違う反応をした。

「フーム、キリの皿は嘘を言つていしないな。」

「ねえ……わざの武器もつ一回みせて……あと銃の方もみせて
くれ……」

「あらあら、異世界なんて凄いわね~」

涼子は「一ータに鞠川先生はいろいろな反応をしていた。まあそれはいいけどな。

その後、こらこらあつてバスの鍵を手に入れ職員室を出る」とした。

(まあ、一ータでは原作どいつだな。それでどいつなの?)

そうして一行は職員室を出た。

第三話 新たなる力「バニシング・ドループ」、「野生の舌」（前書き）

スパロボOGやった人は分かるかな？あとまたクダクダです。

第三話 新たなる力「バー・シング・ドル・バー」、「野生の舌」

俺達は職員室を後にしバスえと向かつた。

「いいか！転ばすだけでいい！戦闘はある程度避けろ！」

奴ら 音には敏感だから音はあんまりたてないよう」ね!」

そして階段付近えと差し掛かると。

階段付近に目を向けるとそこにはそこには、奴らに恐れそうになつてゐる生徒が4人がいた。

「嫌つ！ 来ないで！」

「四」

「クソッ！下がつてろ！」

「死にたくないなら伏せてろ！」

俺がそう言つと5連チェーンガンを発射し 奴ら を撃破する。

ダダダダダダダダ――――――

「ハアツ――

グシャ――

そうして冴子も加わって 奴ら を全滅させた。

「あ、 ありがと……」

「声をだすな。 噛まれた者はいないか?」

冴子が聞くとみんなはいえいえとジユースチャーで答えた。

「俺達はこれからバスで学園を脱出するが君達はどうする?」

俺がそう言うとみんなついてきた。その後、玄関先の 奴ら を
どうにかして外に出ようとしたとき。

ガキイイイン――――――

俺の目の前に居た男子生徒の持つていたさすまたが扉の縁に当た

つて音が響き渡つてしまつた。

「しまつ「みんな走れー！」」

孝がそう叫ぶとみんな走つた。

「なんでさけんだのよー近くに居る 奴ら だけやつつけばいいじゃない！」

「無理よーあんなに響いちゃー！」

沙耶がそう言つも麗がそう言つて近寄つてきた 奴ら を倒した。

「チツ！みんな先行け！」は俺が引き受けん！..」

「なつ！？何言つてるんだ！？」

孝がそう言つも俺は。

「まあ見てな。行くぜー！アヴァランチ・クレイモアー・ソリッドソードブレイカー！スラッシュ・リッパー！行けつ！..」

俺がそう言つと、肥大化したような肩のハッチが開き中からチタン弾が発射され背中に装備したソリッドソードブレイカーとスラッシュ・リッパーが作動させると一気に 奴ら を倒していった。

だが 奴ら は減るところか増える一方だ。一体どこに隠れてい
たんだ。俺はそう思いながら 奴ら を倒していると。

「「淳！！」」

声が聞こえ振り向くとそこには武器を持つた美鈴と敏美が居た。
すると二人は。

「「私達も手伝う！..！」」

「なつ！？お前な何言つてるんだ！早く行け！..！」

俺がそう言つも一人は嫌だといって 奴ら を倒そうとするがそ
の後ろに 奴ら が近寄ってきた。

「！？美鈴！..！敏美！..！後ろ！？」

俺がそう言い加速するも間に合わない距離だつた。一人は後ろに
居る 奴ら に気付くももう遅かつた。

二人は悲鳴をあげた。

（クソッ！間に合わないのか！）

俺がそう思つた次の瞬間、一人は光に包まれた。

「な、何だ！？」

淳サイトエンド

美鈴、敏美サイト

私達は淳を助けるためにきたがその後ろに 奴ら がもうすぐそ
ばまで近寄っていた。もう駄目と思つた瞬間私達は光に包まれてい
た。

رالرا

「一体？」

私達がそう言い周りを見ていると。

「よかつた。間に合つて……」

「「！？」」

私達は声が聞こえた方を向けるとそこには一人の美女が居た。

「あなたは一体？」

「誰ですか？」

「私はミカエル。あなた達でいう大天使というのです

「私達に一体？」

「何かよつですか？」

私達が聞くとミカエルは。

「ええ。あなた達に秋月淳と同じ力を授けたいと思いまして」

「「...」」

私達は驚いた。私達が淳と同じ力をもらえると思っていなかつたからだ。私達は少し考えてそして

「「お願いします！！私達に淳と同じ力をーー」」

「クスッ、わかりました。ではアナタ達に力を」

そして私達はまた光に包まれた。

美鈴、敏美サイトエンド

淳サイト

クソッ！一体何が起こったんだ！そう考へてゐると光が無くなつてゐた。そして俺は驚いた。そこにはヒュッケバインMK-IIの装甲を付けた美鈴とビルドビルガーの装甲を付けた敏美が居たからだ。

「なつ！？美鈴、敏美その鎧は？」

俺が聞くと二人は。

「よく分かんないけどミカエルっていう人がくれたの」

と敏美がそう言い俺は。

(ミカエル…アンタ何やつてるの！？まあ、二人が無事なのがいいけど…)

俺が考へてみると美鈴と敏美が俺の顔を見て。

「…これで淳と一緒に戦えるね」「

うつ…か、かわいい…、あーもうわかつたよー！？もづ。

「それじゃあ一人共無茶はするなよ。よし行くぜーーー！」

「「うんっ！！」

一人が領き 奴ら に向かつて攻撃した。

第四話 学園脱出（前書き）

まだグダグダです。感想をお願いします。

美鈴サイト

私は今、ミカエルさんがくれた力で奴らを倒していた。

「これで落ちて！チャクラム・シユーター！..」

キュイイイイイイイイン！！！

左手に装備してあつたチャクラム・シューターを起動させ
の頭部を破壊した。そしてバスの方に近くど。
奴ら

「みんな！－ここは私が援護するわ－！」

みんな私の装甲を見て驚いているが私はそれを無視し 奴ら に
M13ショットガンを放つた。

ダンツ――ダンツ――ダンツ――ダンツ――

だが 奴ら は何故か減るところか増える一方だ。でも 奴ら
は一ヶ所に居たためこの武器で一気に倒すと思つた。私は一気に加
速すると後ろから巨大ならランチャーが出現し私はそれを装着した。

「「それで一気に決める……Gインパクトキャノン……発射……」

そしてそのランチャーから発射したエネルギー弾は 奴ら に命中した瞬間その周りにブラックホールが発生し 奴ら は全滅した。

（よし……れだつたな行ける……）

私はそう思いながら 奴ら を倒していくた。

美鈴サイトエンド

敏美サイト

私は今日の前にいる 奴ら にM90アサルトマシンガンを発射しながら倒していく。

「「これでっ……Gインパクトステーク！」
ズダンツ……ズダンツ……ズダンツ……ズダンツ……！」

Gインパクトステーキを食らつた奴らは吹き飛んでいった。

「これで一気に決めます！－ビクトイム・ビーグ－！」

そう言うと装甲がバージして高機動モードになると物凄い速さで奴らを倒していく。

「早く奴らを倒していかないと」

私はそう言いながら 奴ら を倒していった。

卷之三

淳サイト

「アヴァランチ・クレイモアー！」

「たぐつ！？ 奴らは一体どこに隠れていたんだ！？」

そう思いながら 奴ら を倒していると。

「うわあああああああーーー！」

「ーー？」

悲鳴が聞こえた方を向けるとそこにはタオルをかけた男子生徒、卓造が 奴ら に捕まっていた。

「クソッ！ おい卓造絶対動くなよーー！」

俺はそう言ひと〇・〇・ライフルを構えて卓造の周りにいた 奴ら を撃つた。

ダンッ！－ダンッ！－ダンッ！－

〇・〇・ライフルを発射しながら周りにいた 奴ら を倒してい
つた。

「おい、大丈夫か！？」

「あ、ありがとう」

俺は聞くと卓造はお礼を言った。

「お礼を言つて いる暇があるなら早くバスに向かえ！！」

俺がそう言うと卓造は頷いてバスへと向かつて行つた。しばらくバスを援護していると。

「淳君！ 美鈴ちゃん！ 敏美ちゃん！ もういいわよーーー！」

バスの方から鞠川先生が大声で言つた。バスの準備が出来たようだ。

「よし！ 美鈴！ 敏美！ 行くぞーーー！」

俺が大声で言つと二人は。「「うん！？」」とこたえてバスの方へいった。

「それじゃ俺も「……つてくれーーん?」

俺は声が聞こえた方に顔を向けると何人かの先生と生徒がこっちに向かってくる。まあ、先生の方は分かる。確か紫藤とかいう嫌なヤツだ。つてちょっとまで確かあいつ……まずい！俺がそう思つて急いでブースターをひらき一気に加速した。

全く状態じゃない、人が人を食べるなんて。…まあ今考へても仕方ないですね。しかし数が多いですね…、このままじゃたどり着かないですね。どうすれば?

「先生っ!…足首捻りました!」

…おや、どうやら私はまだ神に捨てられてないようですね。ではここにはここからのりのHサになつてもうござりましまよ。

「おや、そうですか。ではここまでのようですね」

私はこの生徒の顔を蹴ろうした次の瞬間。

「前より大口径だ!ダダで済むと思つたな!…」

「「え?」」

当然後ろから声が聞こえた次の瞬間近寄っていた奴らが次々と倒していく赤い何かが居た。

「それで、おい、大丈夫か？」

「あ、ありがとうございます…」

な、何だこいつは！？化物か…！」

「おい、お前一体なにやねうとしたとしていた。足首を痛めた生徒を蹴りとしたように見えたが」

「へつー見られていたとは。…だが。

「おやつ、何のことですか？」

「…」

紫藤サイトエンジニア

淳サイト

「おや、何のことですか？」

どうやらなんとかして誤魔化そうとしているのがバレバレだ。

「フンッ、勝手に言つてゐ。おい早くバスへ行くぞ」

俺は足首を捻つた生徒を助けバスへと向かつた。そしてバスに乗り込み。

「鞠川先生…出してください…」

「…ありがとうございます。リーダーは毒島さんですか？」

「そんなのは居ないみんな脱出するために手を組んだだけだ

紫藤の考えていることは分かる。自分がリーダーになると書いてくるんだろ。

「もう人間じゃない。人間じゃない！」

鞠川先生がそう咳き 奴ら をひいて行つて学園を脱出した。学園を出ると町はあちこちから火がででいた。これから始まる地獄に俺達を乗せたバスは町えと向かつて行つた。

第五話 新しい能力 「国境なき軍隊」（前書き）

分かる人には分かる！！

第五話 新しい能力 「国境なき軍隊」

バスをしばらく走らせていると、原作どおり金髪の不良が騒いでいる。俺は一応無視し美鈴と敏美に話しかけた。

「なあ、一人に力をくれたミカエルは俺に何か言ってなかつた？」

俺は一人に聞いたが。

「えつ？ ううん」

「何も言つてなかつたよ」

「そうか……」

どうやらミカエルは俺には何も言つて無いか。そう思いながら自分がポケットに手を入れた。

カサツ……

(ん……何だ?)

ポケットの中に何か入っていた。それをポケットの中から出すとそれは手紙だつた。差出人を見るとそれはミカエルからの手紙だつた。俺はその手紙を開いて見てみた。そこにはこう書かれていた。

秋月淳へ

あなた達がもし目的を達成した後のことを考えてアナタに新しい能力をあげたいと思いましてこの手紙を送ります。そしてアナタに与える能力はメタルギアの能力です。まず、MSFの本拠地であるマザーベースが太平洋のど真ん中に設置しておきます。これで奴らは絶対入つてこるません。更に支援補給マーカー（設置型）を使えば武器、アイテム、大型兵器、AI兵器などを寄越すことが可能です。ちなみにアナタはMSFの総司令官という地位ですのでコードネームは『スネーク』ですのをお忘れなく。ちなみにメタルギアに出てきた登場人物もマザーベースにいますので。では淳、アナタに幸運を。

ミカエルより

……えーっと、何故俺がMSFの総司令官なの！？ミカエルさんアンタ何考てるの！！俺は愚痴を言いながら念のため通信をかけてみた。

ビィー！ビィー！ビィー！

ガチャッ

『こちらカズ』

スグーーー！ホントにカズが出来たーーー！ついでじゃなくてーーー！

「うー、ひづらスネーク」

『ん…何だボスか。どうしたんだ？』

「いや…世界がこんなことになつてちやんと通信出来るかと思つて…」

『何だそんなことが、通信なら大丈夫だ。こここの通信は普通の通信じゃないからな、ちゃんとできますよボス』

『ひやうマザーベースの通信は大丈夫みたいだ。』

「わかった。何かあつたらまた通信する」

『了解だ。スネーク
ガチャッ』

フウ、まさかカズが出てくれた驚いた。全くミカエル一体中考えてるんだ。まあおかげでこちらの最終目的地が出来ただけましか。

俺はそんなことを考えていると紫藤がリーダーになると突然言っていた。その後、俺が言つたことにみんな驚いていた。まあそうだろう、紫藤が自分が生き残るために生徒を見殺しにしようとしたのだから。さてこの後どうなることやな。

オリキャラ、能力紹介（前書き）

今回はオリキャラと能力の紹介をしたいと思います。

オリキヤラ、能力紹介

名前 秋月淳

身長165cm 体重 49kg 年齢17歳

要素

スパロボOGのキョウスケが少し若くなつた感じで髪は赤い。

転生理由

大天使ミカエルが休日のとき読書をしているとき誤つてカッターナイフを落としてしまいその下を歩いてた淳に当たつてしまい死んでしまつたから。

生前

学園では普通に過ごしていたが頭が良くスポーツはすべてプロ級で異性からはモテモテだった。

趣味

ゲーム ブラモ作り 読書など

好きなゲーム

スパロボ系

好きな機体

アルトアイゼン・リーゼなどの近接型の機体

能力

アーマー装着
アルトアイゼン・リーゼ

SEED

MSFの総司令

アルトアイゼン・リーゼの固定武装解説

5連チエーンガン

アルトの固定武装で射程のある武器。牽制用だが 奴ら あいてなら一撃で倒せるほどの威力がある。

プラズマホーン

アルトの頭にある近接用の武器。角にプラズマを流し敵を切り裂くことが可能。 奴ら だけでなく車なども切ることができる。

リボルビング・バンカー

アルトの固定武装の中でよく使われる武器。先端が尖つており敵に刺した後リボルバー式の弾丸で釘うち機の要領であいてを撃ち抜くことが可能で戦車の装甲も貫通できる。 奴ら あいてだとバンカーを使わなくても倒せる。

アヴァランチ・クレイモア

アルトの肩に装備された武器。中にはクレイモア弾と炸裂弾が入つており至近距離にいる敵を倒せることが可能。 奴ら あいてだと数が多い時に使用する。

エリアル・クレイモア（必殺武器）

アルト最強の武器。まず5連チエーンガンで牽制し近くまで寄つた瞬間プラズマホーンで切りつけ地面に叩きつけリボルビング・バンカーを打ち付けた後アヴァランチ・クレイモアをお見舞いする。なおこの武器は本編ではまだ使っていない。

アルトアイゼン・リーゼ追加武器

O・O・ライフル

アルトに追加された射撃武器。この武器は実弾とビームを撃ち分けで撃つことが可能。この武器はヴァイスセイバーの武装だが淳の希望で付けた。

スラッシュ・リッパー

アルトに追加された武器。アルトの背中に装備されており使用すると手裏剣のような武器が出てきて敵を切り裂く。

ソリッドソードブレイカー

アルトに追加された遠隔操作型武器。アルトの背中に装備されおり使用すると8個のソリッドソードブレイカーが発射され敵を攻撃する。なおこの武器は撃つだけでなく敵にアタックすることが可能。この武器もヴァイスセイバーの武器だが淳の希望で付けた。

シシオウブレード

アルトに追加された武器。両腰に装備してあり日本刀の形をしている。切れ味は抜群で戦車の装甲を豆腐のように切り裂くことが可能。ちなみに淳はこれを一本もつている。

SEED

知っている人は知っているガンダムSEEDの一部のキャラが使用できる能力。使うと視界がクリアになり敵の動きがよく分かるようになる。

MSF総司令官

ミカエルが追加してくれた能力。孝達の両親の無事、または避難民と共に逃げるさいの最終目的地であるマザーベースの総司令官。

アーマー 装着

秋月淳が生き残るために頼んだ能力。アーマーを装着する事でその装着したアーマーの能力が使用できる。淳の場合アルトアイゼン・リーゼの能力が使用できる。

追加システム

G Nドライブ

アルトに追加されたシステム。半永久的に生み出すエネルギーで機体や武器の使用が可能。ちなみにアルトのG Nドライブはツインドライブシステムである。

ツインドライブシステム

アルトに追加されたシステム。G Nドライブ2基のマッチングによって二倍ではなく、二乗化した粒子量を得ることが可能。

オルゴンクラウド

アルトに追加されたシステム。

アルトの急加速に発生するGを抑えるために付けたシステムだが、機体を瞬間移動したり、バリアなどを発生させることが可能。

ラムダードライブ

アルトに追加されたシステムパイロットの思いを力にかえることが可能だが、まだはつきりしたことは分かっていない。

P S装甲

アルトに追加されたシステム。一定電圧の電流を流すことで相転移

する特殊な金属でできた装甲のこと。一定のエネルギー消費と引き換えに物理的衝撃を無力化できる。なお機体のエンジンはGNドライブなのでエネルギー切れは起きない。

弾数無限

その名の通り弾切れが起きないシステム。アルトの武装は弾数式なので重要視されている。

第六話 激怒！－（前書き）

何処かで見たような……？

第六話 激怒！！

俺が言ったことに紫藤は青ざめている。そしてみんなは驚いていた。まあ、気にしないけど。更に紫藤をリーダーと認めない生徒が俺の後ろにいる。まず原作メンバーの他に、森田、美鈴と敏美、俺達が助けたタオルをかけた男子生徒とその彼女の女子生徒、卓造と麻、卓造達と一緒に逃げていた男子生徒と女子生徒、（ちなみに女子生徒はホントは紫藤の信者になるはずの人）そして俺が助けた奴らのエサになりかけた男子生徒、冬木（バスでしばらく移動してた時に名前を教えてくれた）が居た。

「い、こんな状況でみなさんほリーダーが必要無いのですか？」

「どうやら紫藤は焦つててるようだ。まあ、当然だろう。

「確かに、リーダーは必要かもりませんね。先生……」

俺の後ろにいる卓造がそう言った、「なら……」と紫藤が言うとしたが、まさかこういつとは俺自身驚いていた。だつて予想外だもん。

「俺がリーダーと認めるのは秋月淳だけだ！」

……つて、えつ——！？お、俺がリーダー！？何言つてゐるの卓造！？

？確かにリーダーは孝だらう！？

「私もリーダーは淳が良いと思います」

おいつ、麻!? で、いいんだよな? 何でお前まで!?

「確かに、リーダーは淳が良いと思うわね…」

「私もその意見に賛成だ」

「俺もだ！！ 淳は怪我をして動けなかつた俺のことを助けてくれたんだ！！」

「私、秋月さんがリーダーでいいと思います」

「そ、そんな…皆さんはその訳の分からぬ奴をリーダーと認め
るんですか！？」

おひおひびへ流して。自分の計画が崩れちやくして流していくのだから。

「ええ、彼は異世界人ですが俺達を助けるために頑張ってくれました。あなたの様に自分の命欲しさに他人を犠牲にするような人をリーダーとは認めません」

うおっ、孝が凄いことを言つてきたよ。ちなみにここにいる人には俺のことは言つたがまさか俺がリーダーになるなんて考えなかつたよ。

その後、予想どおり道路は混んでいた。

「1キロ進むのに1時間か…」

「そろそろ潮時ね…」

「みんな、準備はいいか?」

俺がみんなに確認をとる。みんなは頷いてくれたのでバスを降りよつとした矢先に。

「おや、監視をどうしたんですか?」これは一致協力して…

「俺達はバスを降りるぜ。俺達はアンタ達とは違つて目的が違うからな

そう紫藤に言った。

「ああ、そうですか。ええ構いませんよ、ここは自由の国ですか
うね……」

そう言つた紫藤の視線はここひらの誰かに向けられていた。

「しかし、あなたは困りますね、鞠川先生。現状で医師を失うのはメリットが大きすぎます」

そう言い鞠川先生に近づこうとする紫藤の前へアーマーを装着しながら出た。ちなみに後ろでは美鈴と敏美が俺と同じようにアーマーを装着してみんなを守るよつに前にたつた。

「おや? 何のよつですか秋月君?」

「おい、俺の仲間に手をだすな……」

ガチャン!

俺はバンカーの弾を装填すると紫藤が怯えた。

「で、 でしたら武器を置いてこつてださー

べつせじじ紫藤は武器を頼求してた。だが俺は

「断る」

俺がそつと紫藤をはじめ後ろにいる信者達が驚いた表情をした。奴らにとつて紫藤の言つていることが正しいと思つてているのだから。

「あ、 あなたは私達を見捨てるのですか！」

「俺はあんた達を助ける義理はない」

俺がそつと紫藤の信者である金髪の不良が。

「んだビーー紫藤先生が庄じこんだーーひつわヒ武器を渡せや代物ー！」

と俺に掴みかかってきた。だが俺は

「うるせえんだよ……」

俺がそう言い掴みかかった不良生徒の腹を殴った。その際バンカーが生徒の腹に刺さった。ついでとばかりにバンカーを撃ち込んだ。

ダンッ！－ダンッ！－ダンッ！－

バンカーを食らった不良生徒は吹き飛び床に倒れた。そしてその不良生徒は一度と起き上がりないだろう。

「キヤアアアアアアアア－！－！」

紫藤に酔狂していた女子生徒が叫び、男子生徒は怯えた表情をしてこちらを見ていた。後ろのみんなも驚いているが俺は紫藤に近寄った。紫藤は怯えたが。

「紫藤…俺は今まで我慢していたがもう我慢の限界だ…」

俺がそつと紫藤を左手で殴った。

「グハツ！！」

「ここはおまけだ。取つときな……」

もう言ひ渾身の一撃で殴つた。

ズシーン…………

「グギヤアアアアアアア…………」

そして紫藤が氣を失つたようだ。だがまだ殺り足りない。そこで俺は

「おーい！この、」（紫藤）にムカついているヤツいるか！俺
が一緒に手伝つてやるぞ…………

俺がみんなに囁つと「一ータが前に出てきて。

「秋月……最初は俺が殺る……殺らしてくれ……」

そう囁く一ータの目が笑つてゐる。やつぱりまごつとも一
タをいじめていたんだっけ。まあ、いいけどな……（笑）

「よしひーー行くぞピーター。」

そう言い気を失つた紫藤をコーダのところまで走つた。コーダはラリアットの体勢にはいった。勿論俺もだ。

「「クロ・ボバ――――――」」

アシタノ...!...!...!...!

まさか初めてのクローバー・バーが綺麗に決まるとは俺も驚いた。
おっ、どうやら気がついたよいだ。さあバー・ティーの始まりだ！！

「次は俺だ！！！」

次は 奴ら の工サになりかけた冬木だ。紫藤を殺れると分かつて目が笑つてゐるぜー！

「あ……あの……皆さん……ぼ……暴力は……」

え、何?誰か何か言つた?

その後、孝や卓造、ほかのみんな「!!」を痛めつけた。つんつ樂しいね(笑)――

「最後は袋叩きだ!!--賛成ですか!!--」

「――――――賛成!!--賛成!!--」

どうやらみんな参加のようだ!!--あ――パーティーの始まりだ

!!--

みんなで蹴ります、蹴りまーす!!--

「が……モ……ウシマ……」

だから――俺は「!!」の言葉ワカコマヤーン――

そしてボロボロになつた「!!」を麗の前に出した。……やあ殺れ麗!!--

……最後のスイーツのおもしろさに驚かせたらしい！

「ええ……ありがとう……淳（笑）」

うおつ、麗の小悪魔じみた顔がたまらん… さあ殺れ（笑）――！

デジハーネ-----.

麗の渾身の右ストレートを食らって倒れた紫藤。その紫藤に群がる信者ども。こんな状況でも紫藤を信じる馬鹿な連中。

「さて、『三』を殺つたし、やつをどる。」

俺がみんなに言うとみんなバスを降りた。うん！！ゴミを殺つた後はすつきりしたなっ！！！そして俺達はバスを後にした。

第七話 武器補給そして休息（前書き）

ここに現在の淳達のメンバー

秋月淳

異世界からやってきたみんなのリーダー、能力者

小室孝

藤美学園の生徒

宮本麗

藤美学園の生徒

高城沙耶

藤美学園の生徒

平野コータ

藤美学園の生徒

毒島汎子

藤美学園の保健の先生

卓造

藤美学園の生徒

麻

藤美学園の生徒

森田

藤美学園の生徒

藤美学園の生徒、能力者

二木敏美

藤美学園の生徒、能力者

美雪

藤美学園の生徒

冬木

藤美学園の生徒

一樹（後で教えてもらつた）

藤美学園の生徒

第七話 武器補給そして休息

俺達はバスを降りた後、話し合いで鞠川先生の友達の家に行く」となった。そして俺はみんなにMSFのことを話した。そして孝が聞いてきた。

「それじゃそのマザーベースって何が安全なんだな？」

「ああ、何せ太平洋のど真ん中にあるんだからな、セキュリティも万全だ。あつ、それとマザーベースの名前はアウター・ブンだ」

みんなの顔が明るくなつた。まあそつだろう。世界がこんなになつて安全な場所なんて無いと思つていたのだからな。

「それにしてもMSF…アウター・ブン…国境なき軍隊と天国の外側ね…、一体何でこんな名前なの？」

沙耶が聞いてくるが俺は「企業秘密でお願いします」と言つていると。

「フム、ではまずみんなの家族の安否の確認、確認した次第でのアウター・ブンにみんなで避難する、と言つことだな」

冴子がみんなに確認して鞠川先生の友達の家に向かおうとする。

「ちよつと待つて。みんなに武器を渡すから」

「は？ 武器つてあんた…」

「まあ見てな」

そう言い俺は何故か俺のポケットの中に入っていた支援補給マーカー（設置型）を置いて支援物資を記入しスイッチを押した。

力チツ

《支援要請を確認した。今配達する》

何処からともなくカズの声が聞こえみんなビックリしたみたいだ。程無くするとヘリの音が響き渡った。

ババババババ…!!

「？ 何の音だ？」

みんな不思議がつていると。

「おっ！ 来たみたいだ」

みんな俺の顔が向けられていた方を向くとそこにはバルーンにぶら下がっている大きな箱がこちらに向かってきた。

「何あれ？」

敏美が不思議がつているとバルーンは支援補給マークー（設置型）が置いてあつた場所まで来るとバルーンが破裂し箱が落ちてきた。

パンッ… ヒューン… ドッコーン… !

すると淳が箱の方にいき蓋を開けるとそこは大量の武器が入っていた。ちなみにコータはどうと。

「うつしょーい！」

… 何故か踊っていた。

「ちよつとあんた…何これ…」

みんな唖然としていた。

「まあね、みんなこれに着替えてくれ」

そして俺が出したのはMSFの野戦服の一つネオMOSS迷彩服だ。

「着替えろって言つても着替えて何か変わるの？」

一緒に来た女子生徒、美雪が聞いてきた。

「ん？ああこれはMSFの作った野戦服で見た目はだたの服だが中身は全然違う。まずこの服の最大の特徴は俺や美鈴と敏美のアーマーと同じPS装甲が使われている。物理攻撃しかしてこない奴らに対しても完全に無力化できる。更にこれには攻撃補助プログラムも入っていてたとえ訓練していくなくても普通に戦闘できる。そして背中には武器を保管できる場所があり最大で12個まで入る。更にこれは足音を消す効果があり 奴らに見つかる確率は低くなる。そしてその服の中に俺達と同じGNドライブが入っていてPS装甲の電力や携帯の充電でき更にGNフィールドって言つバリアを形成できる画期的なやつだ」

とみんなに説明した。麗や沙耶が呆れていたがみんな着替えることにした。ちなみに女子は近くにあつた家の中で着替えている。

「しばらくお待ちください」

しばらくして着替え終わり俺はみんなに武器を渡した。

「まずみんなに標準装備としてアサルトライフルはM16A1を（サイレイサー・レーザーサイト付き）、ハンドガンはM1911A1（サイレイサー付き）を渡して置く。装備品は無限バンダナだ。この無限バンダナは銃の弾が無くなつた時にバンダナに手を入れるとその武器の弾が出てくる。後の武器は自由に選んでくれ」

俺の説明を聞いた後、みんな各自の武器を取り始めた。そしてみんな武器を自分の背中に入れた。

「ではまず、鞠川先生の友達の家に行こつか？」

冴子が言ひみんな鞠川先生の友達の家に向かつた。

（ 20 分後）

友達の家に着くとそこにはハンヴィー（軍仕様）が置いてあった。

「 … 何故ハンヴィーが置いてあるんだ？」

「 わあ … 、それより早く中に … … 」

喋っていた孝が黙り込んだ。理由は簡単。マンションの中に 奴ら
が居たからだ。さて、どうしよう … … 。

1 倒して呑

2 別の場所を探す

3 諦める

… まあ、ここは一番だな。早く殲滅して少し眠り。俺と美鈴、
敏美はアーマーを装着しそしてほかのみんなは各自の武器で 奴ら
を一気に倒していく。

「おひつ……」これで終りだ……シシオウブレード……一刀両断！
！」

ズバッ！！

「我が剣に絶てる物無し」

そして俺は最後の一体を倒して決め台詞をいった。俺は剣を鞘に戻しアーマーをバージして鞠川先生に言った。

「それじゃ鞠川先生、部屋に案内して貰へどさー」

「はいはーい

「はいはーい

先生がそう言つみんなを部屋に案内した。部屋に入るとそこは高級感あふれる部屋だった。そして俺達は世界が崩壊して初めての夜を過ごした。

MSFチーム装備一覧（前書き）

今回はMSF（淳達の）メンバーの武器を紹介します。ちなみに標準装備であるM16A1（サイレイサー・レーザーサイト付き）とM1911A1（サイレイサー付き）は表示しませんが、M16A1のオプションパーツをつけたさいは表示します。秋月淳、上条美鈴、二木敏美は標準装備以外装備していない（能力者だから）ため表示しません。

MSFチーム装備一覧

小室孝

(アサルトライフル)

M16A1 (ショットガン装備)

(ハンドガン)

無し

(ショットガン)

C A W

M37 (ロングパレル)

(サブマシンガン)

無し

(スナイパーライフル)

無し

(マシンガン)

M G 3

(ミサイル)

M202A1

(その他武器)

スタングレネード

富本麗

(アサルトライフル)

G 1 1

(ハンドガン)

P M (サイレイサー付き)

(ショットガン)

無し

(サブマシンガン)

UZ61	(サイレイサー付き)
MP5A2	(サイレイサー付き) (スナイパー・ライフル)
無し	(マシンガン)
無し	(ミサイル)
LAW	(その他)
FAL	無し
SUG	平野コーダ (アサルトライフル)
カンブピストル	M16A1 (グレネード装備)
M19 (レーザーサイト付き)	(ショットガン)
無し	無し
(サブマシンガン)	(スナイパー・ライフル)
無し	(ナイトビジョン)
SV	レールガン (マシンガン)
PTRS1941	PKM M63A1

(ミサイル)
RPG7

(その他)

クレイモア地雷

高城沙耶

(アサルトライフル)

無し

(ハンドガン)

P M (サイレイサー付き)

P B (サイレイサー付き)

6 P 9 (サイレイサー付き)

(サブマシンガン)

M 10 (サイレイサー付き)

M P 5 A 1 (サイレイサー付き)

(スナイパーライフル)

無し

(マシンガン)

無し

(ミサイル)

無し

(その他)

毒島冴子

(アサルトライフル)

無し

(ハンドガン)

無し	(ショットガン)
無し	(サブマシンガン)
無し	(スナイパーライフル)
無し	(マシンガン)
無し	(ミサイル)
無し	(その他)
シシオウブレード (淳から譲り受けた)	
鞠川静香	
(アサルトライフル)	
G 1 1	
(ハンドガン)	
P M (サイレイサー付き)	
(ショットガン)	
スパス 1 2	
(サブマシンガン)	
U Z 6 1 (サイレイサー付き)	
(スナイパーライフル)	
無し	
(マシンガン)	
無し	
(ミサイル)	
無し	
(その他)	

スタングレード

森田
(アサルトライフル)

M16A1 (グレネード装備)

RK47

(ハンドガン)
カンピピストル

(ショットガン)

C4W

(サブマシンガン)
無し

(スナイパーライフル)
無し

(マシンガン)

MG3

PKM

M134ガドリング機関銃

(ミサイル)

M202A1

XFM-43

カーリグスタッフM2

M43
(その他)

無し

卓造

(アサルトライフル)

RPK

ADM63

SUG

M653

(ハンドガン)

無し

(ショットガン)

M37 (サイレイサー付き)

スパス12

(サブマシンガン)

無し

(スナイパーライフル)

WA2000

(マシンガン)

M60

(ミサイル)

無し

(その他)

無し

麻

(アサルトライフル)

G11

(ハンドガン)

C96

(ショットガン)

無し

(サブマシンガン)

MP5SD2 (サイレイサー付き)

UZ61 (サイレイサー付き)

M10 (サイレイサー付き)

(スナイパーライフル)

無し
(マシンガン)

無し
(ミサイル)

無し
(その他)

スタングレネード

美雪

(アサルトライフル)

G11
パトリオット

(ハンドガン)

P M (サイレイサー付き)

(ショットガン)

M 37 (ロングパレル)

スパス12

C A W
(サブマシンガン)

M 10 (バレルジャケット付き)

M 19 2 8 A 1
(スナイパーライフル)

W A 2 0 0 0
(マシンガン)

P T R D 1 9 4 1
(ミサイル)

無し
(その他)

無し
(その他)

冬木

(アサルトライフル)

M 16 A 1 (ショットガン装備)

M 65 3 (ショットガン付き)

(ハンドガン)

無し

(ショットガン)

C A W

(サブマシンガン)

U Z 6 1 (サイレイサー付き)

M P 5 S D 2 (サイレイサー付き)

(スナイパーライフル)

無し

(マシンガン)

M 137 ガドリング 機関銃

(ミサイル)

X F M - 4 3

M 4 7

(その他)

無し

一樹

(アサルトライフル)

R K 4 7 (グレネード装備)

(ハンドガン)

無し

(ショットガン)

無し

(サブマシンガン)

無し

(スナイパー・ライフル)
ナイトビジョン

SVD

レールガン

(マシンガン)

M63A1

MG3

(ミサイル)

LAW

カールグスタフM2

M47

(その他)

グレネード

第八話 仮拠点

俺達はマンションに居た 奴ら を倒してひとときの休息をしていた。

「とりあえず女性陣は風呂に入つておけ。またいつ入れるか分かんないからな」

俺は女子達にそう言いみんなに風呂に入つていった。そして俺達は家の探索を開始した。

「それじゃ俺と森田、冬木は一階から搜索する。孝とコータ、一樹、卓造は二階の搜索してくれ

「わかった。それじゃコータ、一樹、卓造行くぞ」

孝がそう言い四人は二階に向かった。そして俺達も一階の搜索を開始した。

（数分後）

予想どおり一階からは何もなかつた。そろそろ二階の搜索も終わる

頃だらう。すると一階から。

「やつぱつあつた……！」

俺達が一階に行くとそこには孝達が壊れたロッカーの前に居た。
そしてその場所には、コータが悪人面をしていた。

「……一体どうしたんだ？」

「いや……、コータが……」

するとコータが一つの銃を取り。

「スプリングフィールドM1A1スーパー・マッチか、セミオートだけだけどま、M14シリーズのフルオートなんぞ弾の無駄遣いにしかならないし……」

「おーい、平野……（汗）

俺が声をかけるもコータは次の銃講座を始めた。

「ナイツSR-25狙撃銃……いや日本じゃそんなもの手に入らないからAR-10を徹底的に改造したのか！ロッカーに残つてゐるの

はクロスボウ、ロビン・フッドが使った奴の子孫だよ。バーネット・ワイルドキャットC5。イギリス製の有名な猟用クロスボウだ！！

「なあコータ、これは？」

一樹が残っていた銃を取りコータに聞いた。

「それはイサカM-37ライオット・ショットガン！アメリカ人が作ったマジヤバなショットガンだ！ベトナム戦争でも活躍した！」

「へー…」

一樹がポンプアクションレコータに銃口を向けた。

「たとえ弾が入ってなくとも銃口を向けるな！向けていいのは…」

「奴ら だけか…」

俺達が言つとコータは頷いた。

その後、森田に外を見張つてもらい俺達は弾をマガジンに入れる作業をした。しばらくしてマガジンに弾を入れ終わると見張つっていた

森田が。

「みんな、ちゃんとトレーニングかけてみてくれ」

俺以外のみんなは不思議に思いテレビをつけた。

『警察の横暴を許すなーーーわれわれはあーーー政府とアメリカのーーー開発した生物兵器によるうーーー殺人病の蔓延についてえーーー徹底的に糾弾するうーーー』

テレビで集団がいろいろと叫んでいる。つーか殺人病つて。

「正気かよ！死体が歩いて人を襲うなんて現象科学的に説明がつかはずないのに！」

「ついて」とは彼らは設定マニアなのかな……」「

孝の言つたことに一樹が言つてきた。すると橋のふもとに居た警官が彼らに近付き忠告したが彼らはその警官に帰れコールをし始めた。するとその警官は何か独り言をいい始めヘルメットを被つた青年の頭に拳銃をあて発砲した。次の瞬間画面がしばらくお待ちくださいと映つた。

「……もう警察は崩壊を始めたようだな。軍も多少あてにならなくなるだろな」

俺が言つたことにみんな顔が暗くなつた。すると俺は後ろから気配を感じその場から離脱した。

「……よつと

「淳~…じわつ~..」

「うつふ~ん。うつむつうつへ~ん」

俺が回避するとそこにはタオル一枚だけ羽織つた鞠川先生がいて孝に抱きついた。

「何だ先生か…つて!?.酒くさつ!?.先生酔つてるんですか!?.」

「ちよつとい、ちよつだけよ。ふふ~ん」

俺は嫌な予感がしてそそくさとその場を後にしそうになると孝が俺に

「……、淳……！」行くんだ！？助けていってくれ！？」

「…………」めん……無理……」

俺は脱兎のようへその場を離脱した。

「淳……！？裏切り者……！？」

孝の悲痛（？）の叫びを聞きながら俺は一階に降りて行った。

～ロバ～

「ふう～

俺はため息を吐きながらソファーに腰をおろした。すると後ろから突然誰かに抱きつかれた。

「「淳～」

「うわっ！？……何だ美鈴と敏美か…って！？酒くさつ！？お前な
酒飲んだのか！？」

何でこの人達は酒に走るんだ。

「だつて～世界がこんなになつて～」

「私達疲れたんだも～ん

「そ、そつか…。分つた、今はゆっくり休んでくれ

そう言つと二人は。

「それより～私達～」

「淳二～

「～話があるの」

「な、何だ？」

俺が一人に聞くと。

「私達ね」

「淳の事が」

「大好き！！」

「……つは？ な、何で一人とも俺が好きなんだ？」

俺が不思議がつて二人に聞くと。

「私達が 奴ら に襲われそうになつた時に——」

「助けてくれた淳の事が～～」

「「好きになつたの……」」

二人とも顔を赤くして恥ずかしがっていた。そうか…俺の事が好きになつたのか。よしつ！俺も男だ！一人にちゃんと返事をしないでな！！

「……よしわかった!! 一人とも俺が絶対幸せにしてみせる…。
だから一緒に生きて頑張ろうな…!!」

「「うんっ…ありがと…淳っ…」」

二人が俺の頬にキスをして俺の肩に寄り添うにして眠った。

「……どうしよう…、動けない…、まっいつか

俺はそう言い俺も眠りに着いた。

第九話 希里親子を助ける！—そして新しい能力「ゴースト」（前書き）

「」で美鈴と敏美の武器一覧です。

美鈴

ヒュッケバインMK-2 固定武装
頭部バルカン
ビームソード
フォトン・ライフル
チャクラム・シユーター
Gインパクトキヤノン（必殺）

追加武器

Gインパクトステーク
リニアミサイルランチャー
M13ショットガン
F2Wキヤノン

以上

敏美

ビルドビルガー 固定武装
3連ガドリング
M90アサルトマシンガン
コールドメタルソード
スタッギングビートル・クラッシャービクティム・ビーグ（必殺）

追加武器

Gインパクトステーク

グラビトン・ランチャ一

ネオ・チャクラムシユータ一

F2Wキャノン

以上

第九話 希里親子を助ける！—そして新しい能力「ゴースト」

俺は一人の告白を受け今一人は俺の肩に寄り添つて眠つていて。俺も少し眠りうつと目をつむつた瞬間「一タの声が響き渡つた。

「ロックンロール！！」

ズダンッ！！

銃声からしてSVDのものだろう。と言うことは多分ありますを助けているのだろう。俺は一人を起こした。

「おーい、二人とも起きて」

「うーん……」

「あー、淳おはよー」

一人は目を擦りながら起き上がつた。

「うんお早う。二人とも今すぐ軍服に着替えてアーマーを装着して。戦闘準備だ」

「何かあったの？」

美鈴が聞いてきたので俺は答えた。

「ああ、多分コータが生存者を助けているんだろうな。だかな俺達も助けに行くぞ」

「「うんー」

「コータ！ 一体何があった！」

一人とも頷いて脱衣場に向かった。俺は二階に上るとそこにはスナイパーライフルを構えたコータ達が居た。

「じつはある親子が民家に走っていてそここの住人に助けを求めたんだけどその住人が槍のような物で父親が指されそうだったんだ！」

「どうやら原作どうりだな… つてあれ？ 刺されそうだった？」

「「一タもしかしてその父親つてまだ生きてるの?」

「?、うんそうだけど?」

「どうしたんだ?」

「一タと卓造が不思議そうに聞いてきた。「いや……何でも……」と答えた。どうやらあります父親は生きているようだ。」

「それで孝は?」

「孝ならその親子を助けるために外に居るよー。」

と一樹が指を指した方を見ると孝が何処で手に入れたのか分からないがバイクに乗つて親子のいる住宅へ向かっていた。

「わかった。それじゃ俺は美鈴と敏美と一緒に外に出て 奴らを撃破していく!」

俺はそのまま一階に向かつた。すでに美鈴と敏美がアーマーを装着して待つていた。

「淳！」

「いっちの準備出来たよ！」

俺は「わかった」と言いアーマーを装着して外に出た。

「よしッ！行くぞ！！一入ともーー！」

「「わかつた！！」」

一人はそう言い俺達は奴らに向かって攻撃を開始した。

孝サイト

くそっ！助けに来た俺がまさか脱出出来ない状況になるなんて！

「孝君すまない。私達のためにこんな田になつてしまつて」

と父親が謝つてきた。

「いえ、気にならないでください」

俺が一人に話し合っていると塀の外から何か聞こえた。

「アヴァランチ・クレイモア！！」

ズドドドドドドドドッ！…！

「Gインパクトキヤノン！！発射！！」

アーティスト・ノート

キニルルルルルル！？！？！

「これでーー！ビクトイム・ビーグーー！」

ズバババババツ！！！

どうやら淳達が外で 奴ら を倒してこよう。だが 奴ら はまだ沢山いる。クソッ！

「お兄ちゃん、これ何の音？」

と少女が俺に聞いてきた。

「ああ、これは俺の仲間が外で戦っているんだ」

ちくしょう！－俺は何も出来ずにここにいるだけなんて！－俺がそう思っていた。すると突然。

（それではアナタに力を与えましょう…）

「－！」

突然、頭の中から声が聞こえた。

（誰だ！－）

俺が頭の中にそう思つているとまた

（私はミカエル。秋月淳達に力をあげた者です）

(ーー！何だとーー！)

突然頭に響き渡るミカエルと言う奴が俺に力をくれる？だが俺は…

（…わかったミカエル。俺に力をくれつ！みんなを守れる力を！
！）

（わかりました。ではアナタに力を…）

そして俺は光に包まれた。

孝サイトエンド

淳サイト

「クソッー！一體全体何処に隠れていたんだ！？」

俺は愚痴を言いながらも〇・〇・ライフルを使い 奴ら を倒していった。

「まつたく本当だよつー！」

美鈴がM13ショットガンを使いながら言い

「一ノ感言」

敏美も文句を言いながらネオ・チャクラムシューターを使い奴らを倒していった。

クソッ！－孝達は無事何だろ？うな！？俺がそう思つていた瞬間。

シーラン...!...!

— ! ! ! !

突然孝蔵が門の附近で七日ばかり騒音音が響く。暮の

「な、何だ！？」

俺は爆発音が響いた場所を見るとそこにはゲシュベンストMK-

「な、孝君！？そのアーマーは！？」

美鈴は驚いた表情をしていた。

「ああ良く分かんないけどミカエルがくれた物だ」

（ミカエルさん！？だからあんたは一体何考えているの！？）

俺は心の中で愚痴を言つていると。

「淳！…俺も手伝つ…奴らを倒すぞ…！」

そう言い孝は奴らに攻撃を開始した。

「まつたく…、美鈴…敏美…孝に遅れるを取るんじやないぞ

…！」

「「うんわかった…！」」

二人とも頷き 奴らを倒していった。そして数分後 奴らは全滅して俺達は親子の居る場所へ向かった。

「あの～、大丈夫ですか？」

敏美が聞くと父親は「大丈夫です。ありがとうございます」と言いお礼をしてきた。

「ほう～、ありすもお礼を言って」

父親に言われて少女もお礼を言つ。

「うん、お兄ちゃん、お姉ちゃんありがとうございます！」

ありすがお礼を言つた後俺は。

「みんな早く移動するぞ。また 奴ら が来るかもしれないからな？」

俺の言葉にみんな頷きマンションに向かつた。ちなみにこの住人には悪いけど支援砲撃マークー（投げ）型）を投げ込んでおいた。後はこのスイッチを押すだけ……「ヒヒシ

その後、俺は孝に武器を見せてもらつた。

ゲシュベンストMK-2改（カイ仕様）

リープ・ミサイル

ファンナウト・ミサイル

F2Wキャノン

ジェット・ファントム（必殺）

究極！ゲシュベンストキック（必殺）

追加武器

G・リボルヴァー

M13ショットガン

メガ・ビームライフル

HIVビームカッター

以上

……何故近接戦闘用の機体に射撃仕様のF2Wキャノンがあるんだ？さらに言えばゲシュベンストMK-2S型の必殺技があるんだ？

そして俺達は無事マンショソに着き（孝がアーマーを装着して戻つて来た時はみんな驚いていた）脱出の準備をし始めたが…、まさかのアクシデント発生…！なんとハンビーのガソリンがまったく無い状態だつた…！

「ちょっと…？何でハンビーにガソリンが入つて無い訳…？」

「わ、私に聞かれても～（汗）」

沙耶は鞠川先生に積めよつていた。

「淳どうすんだ？」の人数じゃあ歩いて行くのは危険だぞ」

冬木が俺に聞いた。確かに、この人数じゃあ歩いて行くのは無理だな。ん、またよ…そうだ…！あれがあるじやんか…！俺はすぐに支援補給マーク（設置型）を取り出しあるものを取り寄せた。

「？秋月さん何やつてるんですか？」

美雪の言葉にみんなこっちを向いた。

「まあ見てな…つてもう来たのか」

みんなが俺の向けている方に顔を向けるとそこにはバルーンにぶら下がつた一台の装甲車がこっちに向かってきた。

「おい淳…あれつて…」

「ああMSFの所有する装甲車だ」

俺は森田の問いに答えていると、装甲車は支援補給マーク（設置型）が置いてあった場所まで来ると破裂して落ちてきた。

ぱんつ……ヒュルルルル……ドツゴーン……！

みんな唖然とした表情をしていた。俺の取り寄せた装甲車を見たコータは。

「カシシコーイー！」

……また踊っていた。

「ちよつと淳！？これって旧式の装甲車じゃない！？しかも何で一台しか持つて来ないの！？これじゃあみんな乗れないじゃない！？」

沙耶は俺に詰め寄つて来た。まあ確かにこの装甲車……LAV-t typeGは旧式かもしれないが中身は全然違うのだよ。

「確かに旧式かもしれない……ま、とにかく見てみなさい」

俺に言われみんなが中を見て驚いていた。まあそりゃ驚くよな、だって装甲車の中にシステムキッチンやトイレス、シャワールーム、ベットがあるのだから。

「……ねえ、何か物理的法則を無視して無い？」

「そりゃそりゃ。なんせ四次元空間を使用して中の広さを「1」の装甲車の約10台分の広さにしてるんだもん」

「マジかよ！？」一体MSFの技術は何処までこいつてるんだよー。」

「……少し眩がした……」

俺が叫つと森田は驚き、麗が呆れていた。

「まあ、」これで移動手段が出来たのだ。みんな荷物をこの装甲車に積むぞ」

冴子の指示でみんな荷物を積み始めた。ちなみにあの親子、ありすと鉄一（父親の名前）は一緒に取り寄せたネオMOS迷彩服に着替えている。

～しばらくお待ちください～

しばらくして希望親子は着替え終わりみんなの方も荷物の積み込みが終わったようだ。

「よしっ！みんな早く乗ってくれ！そろそろ出発するぞ！」

俺が言うとみんな装甲車に乗り始めた。この装甲車の運転席は丁度真ん中辺りにあり俺が運転する形になる。その両隣には美鈴と敏美が座っている。そしてみんなが乗り終えて俺はアクセルを踏み装甲車を走らせた。最初の目的地は沙耶の家と決まり俺達は川の方へ向かつて行つた。

原作キャラ紹介（前書き）

今回は原作メンバーの紹介します。

希里親子の武装一覧

希里ありす

（アサルトライフル）

無し

（ハンドガン）

無し

（ショットガン）

無し

（サブマシンガン）

無し

（スナイパーライフル）

無し

（マシンガン）

無し

（ミサイル）

無し

（その他）

無し

希里鉄二

（アサルトライフル）

無し

（ハンドガン）

無し

（ショットガン）

無し

（サブマシンガン）

無し

（スナイパーライフル）

無し

（マシンガン）

M60

M63A1

PKM

MG3

（ミサイル）

無し

（その他）

無し

M134ガドリング機関銃

原作キャラ紹介

小室孝（能力者）

原作メンバーの一人で主人公。原作ではみんなをまとめるリーダーだが本作では淳をリーダーと認めており孝のボジションは副リーダーみたいな感じ。最初は麗との仲は悪かつたが永が 奴ら になってしまって葬つたさい麗に怒りぶつけなれ一人で 奴ら を倒すため出ていこうとしたが麗に止めなれ出していくのをやめた。その後、麗との仲は良くなっている。武装面は主にショットガンを装備している。第九話でミカエルから能力を貰いゲシュベNST MK - 2改（カイ仕様）のアーマーを装着出来るようになった。

宮本麗

原作メンバーの一人でヒロイン。孝とは幼なじみで小さい頃に結婚を約束するほど仲が良かつたが留年した事をきっかけに仲が悪くなってしまいやさしくしてくれた永に惹かれ恋人になつたが原作どなり永が 奴ら になつてしまい永を葬つた孝に怒りをぶつけたが孝のとつた行動を必死止めた。現在は孝の仲は良くなっている。武装面では女子の中で唯一ミサイル兵器を装備している。

平野コータ

原作メンバーの一人。見た目はデブでオタクっぽい感じだが世界が崩壊した後、持ち前の武器知識でみんなに武器の説明をしたり、釘うち機を改造して 奴ら を倒していく。沙耶に対して恋愛感情

を抱いている。武装面では主にスナイパーライフルを装備しており、何故かレールガンを持っている。

高城沙耶

原作メンバーでもう一人のヒロイン。孝や麗とは幼なじみで孝に対して恋愛感情を持っているがなかなか素直になれないシンデレ。武器では主にハンドガンやサブマシンガンを装備している。

毒島冴子

原作メンバーでもう一人のヒロイン。剣道の腕は一級品で木刀で奴らを倒していくほどだが、人を痛めつける事がたまらないと言つ異常なせい癖がある。後、少し抜けたところがあり合つ服がないと言う理由から裸エプロンをしていた。武装面では標準装備以外装備していないが淳からシシオウブレードを譲り受けた。

鞠川静香

原作メンバーの一人。藤美学園の保健の先生で、奴らに襲われそうになっていた所に冴子よつて助けられた。天然だが医療に関しては一級品。武装面では何故かショットガンやサブマシンガンを装備している。

森田

サブキャラの一人。原作では、奴らに噛まれ、奴らになつてい

たが本作では淳に接触したため 奴ら に噛まれずすんだ。武装面では主にマシンガンやミサイルなどの重火器を装備している。

上条美鈴（能力者）

サブキャラの一人で本作のヒロイン。原作では敏美と共に 奴らに噛まれ 奴ら になってしまった。本作では淳によつて助けられたため 奴ら になつていない。第三話でミカエルによつてヒュックバインMK-2のアーマーを装着出来るようになつた。自身を助けてくれた淳に対し好意を持つつており第八話で敏美と共に告白しており淳の彼女になつた。

二木敏美（能力者）

サブキャラの一人で本作のヒロイン。原作では美鈴と共に 奴らに噛まれ 奴ら になつてしまつた。本作では淳によつて助けられたため 奴ら になつていない。第三話でミカエルによつてビルギルガーのアーマーを装着出来るようになつた。美鈴同様自身を助けてくれた淳に好意を持つつており第八話で美鈴と共に告白しており淳の彼女になつた。

卓造

サブキャラの一人。原作ではバスで脱出するため逃げていたが 奴ら に捕まり噛まれてしまつた男子生徒。本作では噛まれそうになつた所で淳によつて助けられた。その為淳に対して信頼しており彼をリーダーとして認めている。自身の彼女である麻と一緒に行動し

ている事が多い。武装面では全メンバーの中でアサルトライフルを多く装備している。

麻

サブキャラの一人。原作では自身の彼氏である卓造が 奴ら に噛まれてしまつたさい自分も卓造の後を追うように噛まれて 奴ら になつた女子生徒。本作では卓造は淳によつて助けられたため生きている。その為卓造同様彼に對して信頼している。ちなみに名前は作者が考えたものである。武装面では主にサブマシンガンを装備している。

美雪

サブキャラの一人。原作では卓造達と共に逃げバスの中で紫藤の演説によつて彼の信者になつた女子生徒。本作では紫藤の信者にならず淳のメンバーになつており彼に對して恋愛感情みたいなものを感じている。ちなみに名前は麻同様作者が考えた物である。武装面では女子の中で唯一スナイパーライフルを装備している。

冬木

サブキャラの一人。原作では紫藤と共に逃げていたが足首を捻り助けを求めたが紫藤に顔を蹴られ悶えている所で 奴ら に噛まれてしまつた男子生徒。本作では紫藤が蹴る前に淳によつて助けられたため生存している。その為淳に對して信頼をしており彼と共に行動している。ちなみに名前は麻や美雪同様作者が考えた物である。武

武装面では主にショットガンやミニサイルなどを装備している。

一樹

サブキャラの一人。原作では卓造達と共に逃げておりバスの中で紫藤の演説によつて彼の信者になるも彼の行動に異議を唱えたが他の紫藤信者によつてバスの外に放り出され 奴らに噛まれてしまつた男子生徒。本作では美雪同様、紫藤の信者にならず淳達と共に行動している。ちなみに名前は麻や冬木、美雪同様作者が考えた物である。武装面では森田同様重火器を装備しておりコータ同様何故かレールガンを装備している。

希里ありす

原作メンバーの一人。原作では最初の夜を父親と共に逃げていたが父親を目の前で殺され 奴らに襲われそうになつていていた所で孝達に助けられた少女。本作では父親はコータ達によつて助けてもなつた。武装面ではMSFメンバーで唯一標準装備以外装備していない。

希里鉄二

サブキャラの一人。原作では最初の夜でありますと共に逃げており住人に助けを求めたが逆にそこの住人に殺されたあります父親。本作では殺されそうになつた所をコータ達によつて助けられた。名前作者が考えた物である。武装面ではマシンガン系を装備している。

第十話 戦場を舞つ超音速の妖精（前書き）

第九話出てきた装甲車の説明です。

LAV-type G (MSF改良型)

MSFで多く作られている装甲車。一応旧式だが改良により現在の装甲車を圧倒する能力を持つている。

武装

GNバルカン

GN//サイルポット × 8

ソニック・ブレイカー発生装置 × 2

移動能力

タイヤによる移転

ホバー機能

特殊システム

PS装甲

GNドライブ
GNフィールド
対EMP処置

以上

なお今回は新しいオリジナルが出ます。

第十話 戦場を舞う超音速の妖精

俺達はあのあとストライク（装甲車の名前で淳が命名）で移動していた。ちなみに支援砲撃マークー（投げこう型）を投げ込んでおいた家はみんな眠りに着いた後マークーのスイッチを押しておいた。その数秒後その住宅にアウター・ヘブンから発射された砲弾は見事当たり 奴ら を引き付ける事が出来た。ちなみにあそこに引き込もっていた住人はカズに確認した所、砲撃が当たつたさい慌てて逃げ出したが 奴ら の餌食になつたらしい。まあ、いいきみだけど。しばらくして川に着いたストライクはそのまま進んだ。ちなみにこの装甲車はホバーでの移動が可能で主に川や海の上を移動するさいに使用する（普段はタイヤで移動する）。俺が後ろを見るとコーダとあります、沙耶以外はみんな眠っている。そして美鈴と敏美は俺の肩に寄り添うように眠っている、美鈴…敏美…寝顔が可愛い…／＼／＼／＼すると上方から歌声が聞こえてきた。声からしてありますだろうしかも英語だ。

「Row、row、row、your boat Gently
down stream, Merrily, merrily, merrily,
Life is but a dream」

「へー、あの年で英語歌えるんだ。しかしコーダの顔が悪人面して
るような…。

「じゃ、今度は替え歌だ」

「うん。」

…おい、まさか…！

「 Shoot, Shoot, Shoot your gun kill them all now! BANG! BANG! BANG! BANG! Life is but a dream, (訳 撃て撃て撃てよみんなぶつ殺せーバン!バン!バン!バン! あーたまんね!) 」

やりやがつたーーーおい 一体何小学生に変な歌教えてるんだーーー！

「 そこのトップタタ！子供にうくでもない歌を押しえるんじゃないーーー！」

あー、沙耶に怒られてる。そんなこといつていた。一度ここで最終確認をする。

「 わからぬするんだ？」

「 わうね…確かに高城さんの家つでここから近いの？」

冬木の言葉に美雪が沙耶に聞いた。

גָּדוֹלָה

「よし、じゃまち高城の嫁に向かおうか」

俺の言葉にみんな頷きストライクに乗り移動を開始した。

（それから5分後）

「わつ・じ・ん・せき 奴ら が いやがる。」

「うわさよー! 何で東坂二丁目に近づくほど奴らが居るのよ

何故か知らないが沙耶の家に近づくほど奴らが増えているのだ！

「クソッ！ 淳！ どうするんだ！ ？」

孝がアーマーを装着してM13ショットガンを放ちながら聞いてきた。

「ふつ、この装甲車を舐めるなよーー行くぜーー！ブレイカーシス
テム起動ーー！」

そう言つとストライクの両脇かな先が尖つた何かが出てきた。

するとストライクの前面が光りフィールドが発生した瞬間、フィールドに接触した奴らが吹き飛んでいった。

「…やつぱつチートだよな？」

「 そ う か ？ 」

キキイイイー！

俺は前方にワイヤーのような物が見え急いで急ブレーキをかけた。

「うわっ！ 何だ！ 何でこんなところにワイヤーがあるんだ！？」

「しるかっ！ …みんな！ …奴ら を迎撃するぞーー！」

俺の言葉にみんなそれぞれの武器で攻撃を開始した。俺と美鈴、敏美もアーマーを装着してすでにアーマーを装着して戦っている孝の援護に向かつた。

「行けっ！ …ソリッドソードブレイカー！ …スラッシュ・リッパーーー！」

キュイイイイイー！ …！

ズバッ！ …ズバッ！ …ズバッ！ …ズバッ！ …
フシユッ！ …フシユッ！ …フシユッ！ …
バキューン！ …バキューン！ …バキューン！ …

「リニアミサイルランチャ一発射！ …」

パスッ！ …パスッ！ …パスッ！ …パスッ！ …
ドッコーン！ …ドッコーン！ …ドッコーン！ …ドッコーン！ …

「グラビトン・ランチャー！ …」

ドッペーン！！！

「リープ・ミサイル！！発射！！」

パカツ！！バスツ！！

卷之三

ダダダダダダダダダダダダダツ――――――――

俺達は奴らを迎撃していくが、何故か減るどこか増えている。

（クソッ！…）のままじや俺達はともかく後ろにいるみんなが危ない！…どうすれば…（

俺がそう思いながら戦っていたなストライクの中が光っていた。

淳サイトエンド

めりすサイト

みんな外で戦っている。パパやお兄ちゃん達、お姉ちゃん達もみんな戦っている…。それなのに私は車の中で大人しくしている。私もみんなを助けたいけど子供の私は戦えるだけの力がない。

「……私、どうすればいいの…」

（それでしたら私が力を与えましょう…）

「…？」

突然私の頭の中から声が聞こえた。

（えつ…？誰…？）

（そんなに警戒しなくても大丈夫です。私大天使はミカエル、秋月淳達に力を与えた者です。貴女が望めばあの子達と同じ力を与えます）

だいてんし…？みかうる…？よくわかんないけど私もお兄さん達と同じ力が貰える。だから私は。

（おねがいミカエルさん！！私もお兄さん達と同じ力を…！）

（ええ、ではアナタに力を…）

そして私は光りに包まれた。

ありますサイトエンジ

淳サイト

（何か嫌な予感が…）

俺がそう思っていたなその予想は当たった。何故ならそこにはファーリオン タイプGのアーマーを装着したありますが居たからだ。

「あ…あります…！…その姿は…？」

鉄一が驚いていた。まあ、同然だつ。まさか娘がアーマーを装着しているのだから。

「うんと、ミカエルさんって言う人がくれたの」

……またあんたかい！！俺がそう思つていたな。

「ええ…ミカエルさんがくれた力です」

「アーティストの才能を引き出すためのアートセラピー」

突然ありすの後ろから声が聞こえた。するとそこからなんとフェアリオン タイプSのアーマーを装着したもう一人のありすが居た。

「えっ!? 一体どうなつていいのーー!」

「ありすちゃんが、ふ……一人！？」

「……………私、夢でもみてるのかな……………」

「私の名前はりおん。あなた達で言うもう一人のありますです」

みんな困難している中、もう一人のあります、りおんが自己紹介してきた。するとりおんは。

「それじゃあります…行くわよ」

「うん…りおんちゃん…！」

するとありますとりおんは 奴ら に攻撃を開始した。つてまさか！？
？あれをやるつもりか！？

「コントロールをそっちに…」

「了解…あります…！」

すると二人はまるで踊りを踊るよつてぐるぐる回り始めた。…間
違いない！？あれをやるつもりだ…！

「パターンセレクト、R・H・B…ヒングージ…」

すると二人は飛翔し 奴ら に向かつて加速し腕に装備されてい
るソニック・スウェイバーを起動させ左右に別れた。

「あります…！」

りおんは近くにいた 奴ら を切り、ありすはソニック・スウェイバーで 奴ら を次々と切り裂いた。りおんは少し離れた所で踊っていた。

「つおんぢやん！..せつち！..」

すると次にりおんが 奴ら を次々と切り裂き今度はありすが踊っていた。しばらぐするとありすとりおんは中央にいる 奴ら に近づいた。

「シンクロ…アタック！..」

二人はぐるぐると回りながら切り裂いていった。

「つおんぢやん！..」

「ありす！..」

「ソソJの決め台詞を言つのか！..」

「ロイヤル・ハート！－

「ブレイカーだよ！－！」

そして一人はソニック・ブレイカーを起動させ一気に 奴らを倒していく。…つわ～、実際に見ると凄いね～。

「よしそーみんなありす達に遅れないように行くぞー！－！」

それからありす達の活躍によつて 奴ら を全滅でき沙耶の母親が救援に来てくれた。

第十一話 高城邸（前書き）

ありますとつおんの武装一覧とつおんの紹介です。

フェアリオンタイプG・タイプS武装一覧

アサルト・ブレード（共通）
バースト・レールガン（共通）
ロール・キヤノン（共通）
ボストーク・レーザー（共通）
ソニック・スウェイバー（共通） ソニック・ブレイカー（共通）
パターンRHB（共通・必殺）

フェアリオンタイプG タイプS追加武器一覧

ハイパー・ビームキャノン（G） ハウリングランチャー（G）
Gレールガン（G）
Gインパクトステーク（S）
シシオウブレード（S）
ブレード・トンファー（S）

人物紹介
希里りおん

ミカエルの能力で産み出されたもう一人のあります。姿はありますに似ており、髪の色は青く性格はスパロボOGのラトウニーに似てい

る。彼女はアーマーを装着している時のみ出現しアーマーを装着していない時はありますの中について、表のありますと話すことができる。フェアリオンタイプの武装は近接用が多い。

第十一話 高城邸

俺達はあのあと沙耶の母親である百合子さん達に助けられ今高城邸にいる。ちなみにストライクも高城邸の人達に回収してもらった。

「さてと…俺はストライクの整備でもしますか…」

俺は回収したストライクの整備をする為車庫に向かう。そこでは松戸さんがすでに整備をしていた。

「ん？ああ君は確か…」

「どうりで…」気付いたようだ。俺は松戸さんに挨拶をした。

「初めてまして。秋月淳です」

「おお、お嬢が言ってた異世界から来た子か！俺の名は松戸だよろしくなボウズ。確かにこの装甲車もその異世界から持ってきたて聞くが？」

「ええ、そのストライクはMSFの技術で作った品物でそこいらの装甲車や戦車じゃストライクには敵いませんよ。しかしそく整備できますね…」

そう俺が気になつてるのは何故松戸さんは初めての見るストライクの整備ができるのかだ。もともとMSF自体はミカエルから貰つた物で技術面もミカエルの特典で最高技術なのだ。

「それなら簡単だ。たとえ技術が進んでも基本設計は同じだからな」

「成る程、それでストライクの整備が出来るんですね」

俺はその言葉で納得した。確かにいくら技術が進んでも基本設計は同じなんだつたな…。俺は松戸さんと一緒にストライクの整備をする事になつた。しばらく松戸さんとストライクの整備をしていると誰かが後ろから声をかけてきた。

「「淳」」

「ん？ 美鈴？ 敏美？ どうしたんだ？」

声をかけてきたのは俺の彼女である美鈴と敏美だった。

「よく分かんないけど沙耶さんが呼んでるよ？」

「一体何だんだろ？」「

「そうだな……」

まあ、理由は分かるけどな。ストライクの整備を松原さんに任せて俺達は沙耶のいる部屋に向かった。部屋の戸を開けるともうみんな来てたみたいだ。

「沙耶さんみんな来たみたいよ

「ええ……、ありがとう麻……」

「それでどういふお話なの？」

鞠川先生はそう言いながらバナナの皮をむいていた。てゆーから持つてきた。

「アタシたちがこれから先も仲間でいるかどうかよ

沙耶の言つたことにみんな驚いていた。

「おい……仲間つて……」

「当然だな。我々はいまより大きく結束の強い集団に合流した形になつてゐる。つまり……」

卓造の言つたことに冴子が沙耶に聞いた。

「そ、う。選択肢は一つきり！ 飲みこまれるか」

「……別れるか。でも別れる必要なんてあるのか？」

孝がそつ言つと沙耶は当然窓を開けて俺達に言つた。

「ここで周りを見わたせばいいわ！ それで分かんなければ……アタシのこじと名前で呼ぶ権利はナシよ！」

俺達は窓のベランダ出で周りを見わたした。外はもう地獄のような状態だった。もう外に生存者はいなく 奴ら だけになつていた。

「手際はいいよつたらアソタのオヤジは……」

「ええ凄いわ！ それが自慢だった。いまだつてそう、こるだけの

「…」を一寸かそこまで。でも…それができるな！」

俺が言つた時に沙耶が答えたが沙耶の様子がおかしい事が直ぐにわかつた。沙耶は両親はすでにやられたと思っていたのだから多分精神のがたが外れてしまったのだろう。だから俺は…。

「おい…沙耶…！」

俺はアーマーを装着し沙耶の襟首を掴み持ち上げた。俺のとった行動にみんな驚いていた。

「あ……なによ、いきなり。でもよつやく

「おまえだけじゃない…」」といふ言ふみんな同じなんだ

「…分かったわ。分かったから放して

沙耶にそつ言いわれ手を離しアーマーを解除した。

「悪かったな…すまん

「ええ本当に、でもいいわ。さ、本題に入らないと。あたしたち

は……

沙耶が何か言おうとした瞬間外からエンジン音が響き渡った。見てみると入り口から沢山の車やトラックがはいつてきた。

「あれは……？」

「そり。この県の国粹右翼の首領！正邪の割合を自分だけできめてきた男！アタシのパパ！」

俺達は下の階へ向かつた。

第十一話 右翼の首領（ドン）高城社一郎……そして告げなれる想い（前書き）

何か……主人公がハーレム化してきたよいな……

第十一話 右翼の首領（ドン）高城壯一郎！…そして告げなれる想い

俺達が下に降りると何人もの部下と避難民があり、そこへ檻に入つた一人の男が運ばれてきた。檻に入っている男を見るとその予想からして 奴ら になつてゐるようだ。そう考えていたら、

「！」の男の名は土井哲太郎！四半世紀もの間共に活動してきた我が同志であり友だ！救出活動のさなか部下を救おうとし…噛まれた

！」

と説明してきた。そう考へてみると沙耶の父親は説明を続けた。

「まさに自己犠牲！人間として最も高貴な行為だ…しかし…。彼はもはや人間ではない。ただひたすらに危険な”もの”へとなり果てた！」

ガシャンッ…！

突然檻の方からすごい音がした。見ると 奴ら 化した部下が檻にぶつかっていた。すると沙耶の父親が鞘から刀を抜いた。そして、

「だからこそ私は今……我が友へ最後の友情を示す…！」

そう言つた瞬間檻の扉が開き 奴ら が飛び出しが。

ズバッ！－！

物凄い速さで刀を降り下ろし 奴ら の首を切つた。その後避難民に鬪えと言いその場を後にした。

「刀じや効率が悪すぎる……」

見ていたコータがそう言つた。

「決めつけがすぎるよ平野君」

「でも田本刀の刃は骨に当てたら欠けますしおも切つたら

……

「コータが冴子の言つたことに反論しようとしたが俺が間にわって入つた。

「おいコータ、そこまでにしておけ」

「なつ！？淳何でだよ！？」

「どうやらコータは熱くなつていいよつだ。少し頭を冷やしてもらおひ。

「確かに日本刀だとそう言つ弱点はあるかもしれない、でもそれは素人の話だ。達人の場合だとそういうことが出来る。例えるなら銃と同じだ。例えどんなに優れた銃でも素人が使えばダダの無駄弾だがお前のような達人なら無駄弾を撃つ事がない。それと同じだ」

俺の説明を受けコータは頭が冷えたようだ。

「そうだな…ごめん」

「気にするな」

コータは謝つたが俺は謝んなくて言つてみんなその場で解散した。

「ねえ、淳」

「ん？敏美どうした？」

「なんで平野君にああいうことを言ったの？」

敏美と美鈴が不思議そうに聞いてきたので答えた。

「ああ、そのことか…あの場合ああ言わないとコーダは暴走するからな。やつと自分に出来る事が奪われると思っていたからな…」

「成る程」

二人共納得したらしい。しばらく三人で高城邸を歩いていると後ろから声をかけられた。

「秋月さん、少しいいですか？」

振り返るとそこにはネオMOS迷彩服を着た美雪がいた。何だか真剣な表情をしていた。

「どうしたんだ？」

「いえ…できれば一人だけでお話したいのだけど」

「？わかった。それじゃ一人共先に行つていってくれかないか？」

俺は一人そう言い先に行つてもらつた。俺と美雪は近いの部屋に入つた。

「それで？ 一体何の話だ？」

「……最近上条さんと一木さんとの仲が良いみたいですが二人とは一体どういう関係なのかと思いまして……」

ん？ なんで美鈴と敏美との関係なんて聞くんだ？

「一人とも俺の彼女だけど

「……そう……ですか……」

すると美雪はうつむくと少し肩を震わせていた。俺が顔を覗き込んだ瞬間驚いた。美雪が泣いていたからだ。

「へつー？ み、美雪ー？ 一体どうしたんだー？」

俺が慌てて聞いた瞬間美雪が俺の胸に飛び込んだ。

「え？ み、 美雪？」

「私、 秋月さんのことが好きなんです！！」

「……くつへい、 今何か言つたよつな……俺のことが好き？」

「……美雪、 今の言葉は一体……」

「そのままの意味です！ 本当に私はあなたのことが好きなんですよ！！」

「と、 とりあえず落ち着いて、 まざどうして俺のことが好きなんだ？」

俺はとりあえず美雪を落ち着つかせてきいてみた。

「……まだ私達が学園にいたさい 奴ら に襲われそうになつてもうだめだと思つていました。でも秋月さん達に助けられた。その時なんです、 秋月さんのこと好きになつたのは……」

「……それじゃあの時紫藤の方にいかなかつたのは……」

「はい……秋月さんのそばから離れたくなかったんです……」

俺はどいつもあの時美雪が紫藤の信者にならなかつた理由がわかつた。美雪は俺のことが好きになつてそばを離れたくなかった。それが信者にならなかつた理由だとわかつた。

「ええと……もう大丈夫か……」

「……はい、だいぶ落ち着きました……」

俺が聞くと美雪はそつ言い俺から離れた。

「……」めんなさい秋月さん……彼女がいのにあのよつなことを言つてしまつて……

「いや……別にいいんだけど……」

すると突然扉が開いたので驚いていると入つて来たのは美鈴と敏美だつた。

「淳。 せつだよのせつだよと答えてあげて」

「そりだよ淳。 いやんと美雪さんと答えてあげて」

「へー!? み、 美鈴! ? 敏美! ? もしかしてさつきの話し聞いていたの! ?」

俺が驚いて一人に聞いた。

「だつてあの時の美雪さんの顔、あの時の私達と同じ顔だつたか」

「う」

「だから分かったの。 美雪さんも淳のことが好きなんだつて……

「で、 でも二人共秋月さんのこと……」

「だつたら美雪さんも私達と同じように淳の彼女になればいいじゃないですか!」

「そりだよ美雪さん。 美雪さんも淳の彼女なつひやになさこよ!」

美雪が言おうとしたが一人がそれをさえぎり物凄い」とを言つて
きた。……つてゆーか何言つてゐるの一人共！？

「上條さん！？」「木さん！？な、何言つてゐるんですか！？」

「だつて、これじゃあ美雪さん可哀想だし…」

「だつたら美雪さんも彼女になれば私達や美雪さんも幸せになる
し結果オーライだよ！」

いや……確かにそうだけど……

「と言ひ訳で…」

「どうなの淳？答えは決まつた？」

二人共が俺にそう言いながら詰め寄つて來た。美雪も俺のことを
見ている……あーーーもつ分かったよーー！

「……分かった、美雪……こんな俺で良ければ付き合つてくれよ…」

「はい！ ありがとうございます秋月さん！ ！」

そう言って美雪は俺に抱きついてキスをした。

「あーーー！ 美雪さんズルイーーー！ 私もーーー！」

「ちよつ！－！敏美ズルイ！－！私も！－！私も！－！」

「ちよつ！お前達少し落ち……ムグツ！？」

こうして俺は美鈴と敏美だけでなく美雪も俺の彼女なつた。まあ、原作じや無理矢理のディープキスだつたし俺達と一緒に来たことが彼女の運命を変えなれたかな別に良いか。その後原作どうり「一タガ壮一郎さんの部下に武器をよこせと言つていたが俺達や壮一郎さんの出現によつて何とか無事に終わつた。

第一二話 EMP攻撃！！（前書き）

少しパクリ有り……済みませんm(ーー)m

第一二話 EMP攻撃！！

俺達は「コーラを助けた後、今後のことを考えてみんなで相談した結果俺は今壮一郎さんの所にいた。

「親御さんを探し出すと?家に帰るのでわなく?」

「そうだ。俺のメンバーみんな自分の家族のことが気になつていいから、だから俺達は壮一郎さんとは別行動になります」

「そうなのだ。みんな自分の家族は大丈夫なのか心配しているのだ。だから俺達の考えは壮一郎さんの安全な場所への移動とはまったく違うのである。

「ふむ。探したしたあとはどうするつもりだ?」

「俺のいた世界の基地が一緒にこっちの世界に来ているのでそこにはいくつもりです。人数が多い時はみんなを守りながいきたいと思います」

「...はつはつはつーなんと仲間思いな男だ!やりたいよいこやるがよい!」

壮一郎さんとの話しが終え外で待っていた美雪と共にみんなの所に向かっていく。

「そう言えば美雪。アーマーの調子はどうだ？」

「ええ、今のところは調子はいいです。…確かライン・ヴァイスリッターですよね？」これはすこし力ですね」

じつはあのあと、ミカエルが美雪にも力を与えライン・ヴァイスリッターのアーマーを装着出来るようになしたのだ。またぐミカエルは一体何考えているんだか。

「そう言えば驚いたと言えば小室さんの方も驚きましたね。小室さんいつの間に宮本さんと沙耶さんと付き合っていたのでしょうか？」

「そうなのだ。孝はいつの間にか麗や沙耶と付き合っていたのだ。てゆーか二つの間に（汗）。ちなみに美雪のアーマーの武器はこんな感じ。

ライン・ヴァイスリッター武装一覧

3連ビームキャノン

ネオ・プラズマカッター
スプリット・ミサイル
ハウリングランチャー（Bモード）
ハウリングランチャー（Eモード）
ハウリングランチャー（Xモード、必殺）

追加武器

メガ・ビームライフル
M90アサルトマシンガン
ハルバー・ランチャー
シシオウブレード

以上

「こんなことを話しているうちに孝達が待っている広場に着いた。

「みんな集まっているか？」

「ええ、みんないるよ」

俺が聞くと麻が答えてくれた。一応ストライクの整備は完了していていつでも出られる準備が出来ていた。

「それじゃさっそく」「あーっ！」って、何だ！？」

突然鞠川先生が大声を出したので驚いていた。

「やつたやつた おもいだしたあ！…うん…うん…絶対にそう！…間違いないわ！！」

……なんか喜んでいる。

「どうしたの先生？…」つぶ

突然喜んだ鞠川先生に聞いていたありすが鞠川先生に抱きつかれ顔を胸に押しつけていた。ちなみに俺や孝、卓造、鉄一さん、女子以外の男子はみんな（ありす…するい…）と思っていたのは言うまでもない。

「お友達の電話番号おもいだしたの！自分の携帯も手帳も持つてこられなかつたから今までおもいだせなくて……」

どうやら鞠川先生の友達の電話番号を思い出したようだ。さつそくかけるため孝の携帯を借りよつと思つた瞬間突然麗が正面玄関のある方へ走つていつた。突然の行動にみんな驚いていたがその理由がわかつた。何故ならそこにいたのはなんとあの馬鹿教師もとい紫藤がいたからだ。そんなことを思つていたなもう麗が銃剣を紫藤に向けていた。

「すいぶんとじ」立派じゃない。紫藤せ・ん・せ・い？」

「み、宮本さん。『無事でな』により……」

突然のことでは紫藤や紫藤信者の奴らもどう対処していいか分からなかった。

「私がなんで槍術が強いか知ってる？ 銃剣術も教わっているからよー、県警の大会じゃ負け知らずのお父さんにーー！」

～全て書くと少々長くなるので壮一郎さんが紫藤や紫藤信者を追い返して鞠川先生が孝の携帯でリサの携帯番号を押している最中まで略します～

「えーと、1が111で、2が111で、3が111で……」

……鞠川先生番号押すの遅つーーまさかここまで遅いとは……

「……代わりに押しましょうか？」

「分かんなくなるから邪魔しちゃダメ！」

あまりの遅さに「一タが言つたが鞠川先生は拒否して押し続けていた。しばらくしてやつと終わったようだ。

《もしも》

繫がつたし！！

「あーリサあ？生きてたねー！あたしもいろいろと大変だつたん
だけど」

どうやら友達が無事で嬉し泣きしていいみたいだ。しづらへ話していたが俺はここであることに気が付いた次の瞬間、辺りが一瞬明るくなつた。

「え? もしもし? もしもし? さあ?」

「なんでエンジンがかんねえんだ！」

「あなた！あなた！いきなりどうしたの？」

「停電と同時にPICOが全部死にました！」

あちこちから怒声が聞こえてきた。やつぱりEMP攻撃のようだ。

ビィー！…ビィー！…ビィー！…

アウター・ヘブンからの通信がきた。通信用のインカム（EMP対策済み）から着信音が辺りに響き渡った。周りにいる俺のメンバー・や壮一郎さんの部下の人や避難民がその音に気付いてこちらをみたが俺は一応無視し通信に出た。

ガチャ

「こちらスネーク！」

『大変だボス！！ロシアの馬鹿共が核ミサイルを撃ちやがった！』

ちなみにこの通信は周りにいる人達にも聞こえている。

「……それで？ロシアの馬鹿共は何発撃った

『4発ほど撃つたがそのうちの3発を自衛隊とアメリカのイージス艦が迎撃したが残り1発の迎撃を担当していたアメリカのイージス艦 カーテイス・ウイルバー の隊員の一人が 奴ら になってしまって乗組員が全滅、その核ミサイルは高々度核爆発を引き起こしてEMP攻撃を引き起こしやがった！！多分ボスのいる地域の電子装置は全滅しているはずだ！！』

「ちつ！まつたくロシアの馬鹿共！！余計なことをしゃがつて！！俺がそう思っていたな正面門から悲鳴が聞こえてきた。

「入ってきたあああ！！来るなあ！！来るなあ！！ぎやあああああ！！！」

「何とかここまで逃げて来た部下がそこで 奴ら の餌食になつた
みづだ。

「門を閉じよー急げ！警備班集合！死人どもを中に入れるな！」

いつも間にか壮一郎さんがそこにいて指示を出していた。

「会長！それでは外にいる者たちを見捨てる」と一郎

「今閉じねば全てを失つ……やれ……」

壮一郎さんの命令で門を閉めていった。すると部下の一人が近寄ってきた。

「会長！奥様！獲物をお持ちしました！」

すると田舎子さんがそれを装備した。てゆーか格好がすごい……。その後、壮一郎さんにも銃を渡そうとしたが無用といいその銃を沙耶に渡した。その後、俺達のメンバーはストライクのある格納庫へ向かった。

「ねえ淳！ストライクはけやんと動くの！？」

「MISFを舐めるなよ！EMP対策はけやんとせつてあるから大丈夫だ……！」

孝が心配して聞いたが俺の答えを聞いて安心した表情をした。

「松戸！ストライク今出せる！？」

「ええお嬢大丈夫ですぜ！ちゃんと動きます！しつかしす」
あストライクは、ちゃんとEMP対策をしてるんだから！」

みんながストライクに乗り込んだが俺と美鈴、敏美、美雪は乗り込まないので孝が大声で言つてきた。

「淳！？何やつてるんだ！？早く乗れよ！？」

「悪いが孝。俺達はここに残る」

俺の言葉にみんなが驚いていた。

「ちよつー？淳何言つてるんだ！？」

「俺達はこれから沙耶の親子と部下、それに避難民を助けに行く。
お前達は早く自分の両親を見つけてここへ！早く！」

俺の言葉に孝達は驚いたがすぐに沙耶が「絶対に生き残つて！！
もし死んだら承知しないわよ！！」と言い、鞠川先生に（運転方法
を一応教えておいた）出すように言いみんなを乗せたストライクは
ソニック・ブレイカーを起動させ 奴ら を吹き飛ばしながら脱出
していく。

「……さて済まないなみんな。俺のわがまま」付け合せついで……」

俺は一緒に残ってくれた美鈴達にそう言った。

「ううう、別に良いよ

「私達もあの人達を助けたいし

「それに壮一郎さんにもいろいろとお世話をになりましたから

「済まないね淳の旦那に嬢ちゃん達

俺達のことに謝る松戸さん。それで……派手に行きますか!! 俺達はアーマーを装着し壮一郎さんのいる正面門に向かった。ちなみに俺達のアーマーを装着を見て松戸さんが驚いていたのは言つまでもない。

第十四話 必殺！－ランページ・コースト！－そして高城邸脱出！－

俺達が正面門に着くと壮一郎さんと百合子さん、5人の部下、12人の避難民達が周りにいる 奴ら と戦っているが流石に数が多い。

「よしつ！－！美鈴！－！敏美！－！美雪！－！壮一郎さん達を援護するぞ！－！松戸さんも出来るだけ俺達から離れないようにしてください－－！」

「「「わかった！－！」」

「わかりやした！－！」

俺はGNドライブから粒子を噴射させ一気に加速した。

「それじゃあ行くよ敏美！－！美雪さん！－！」

「「ええ！－！」」

美鈴が言い敏美と美雪はすぐに武器を構えてそして。

「「F2Wキャノン！――」

「ハウリングランチャー――」

「「「Eモード発射！――」」

俺の後ろから銃声がしたが多分美鈴達が攻撃を開始したのだろう。すると俺の横を強烈なビームが通り過ぎ壮一郎さん達の周りにいた奴らは一瞬で消滅した。壮一郎さん達は何が起こったのか分かってないようだ。さて、ここに来て初めて使うがまあ良いだろう。

「「「ひらひらジヨーカーを引かせてもらひ――」」

そして俺はここに来て初めて使うEEDを発動させエリアル・クレイモアを発動させた。

淳サイトエンダ

壮一郎サイト

どうやら娘達を乗せたストライクが門を突破していったようだ。

「行つたか？」

「ええ、私たちの娘が……愛すべき若者たちと共に……」

わたしの問いに百合子が答える。周りには部下と避難民達がいる。そして更に周囲には死人共がいる。多分もうだめだろう、わたしは部下と避難民達を見たどうやら覚悟を決めたようだ。

「もはや後顧の憂い無し……！」

わたしの言葉に部下や避難民が死人共に攻撃しようとした瞬間。

「「「Eモード発射……！」」

突然後ろから声を聞いたと同時に我々の横を強烈な光が通り過ぎ周囲にいた死人共に当たり一瞬で消滅した。何が起こったのか分かなかつたが次の瞬間。

「「こちらもジョーカーを引かせてもらつ……！」」

聞き覚えのある声が聞こえ後ろを向こうとした瞬間、我々の横を何が通り過ぎた。慌てて前を向くとそこにいたのは……。

淳サイト

俺は壮一郎さん達の横を一気に通り過ぎ 奴ら に攻撃を開始した。まず5連チェーンガンを使い近くにいた 奴ら を抹殺し次に プラズマホーンを起動させそのまま 奴ら を真つ一つにし更にリ ボルビング・バンカーを一体の 奴ら の腹に打ち込み吹き飛ばした。吹き飛ばされた 奴ら はそのまま近くにいた 奴ら を巻き込んでいった。そして留めるとばかりに両肩のハッチを開きアヴァランチ・クレイモアを発射し 奴ら を全滅させた。

「ジョーカー……切らせてもらつた……」

決め台詞を言い俺は壮一郎さん達の方を向いた。

「みなさん大丈夫ですか？」

「えつー…? その声もしかして淳君ー…?」

「ええ、秋月淳です」

俺の声を聞いて百合子さんが驚きの声をあげ他の人達も驚いていた。更に後ろからやつてきた美鈴達にも驚いたようだ。

「松戸…お前生きていたのか…？」

「ええ、淳の旦那や嬢ちゃん達に助けられて、おかげでこのひとつピンポンしてますせー。」

部下の一人が一緒に来た松戸さんに驚きの声あげ松戸さんも元気な声あげた。そして…それじゃあせつやと脱出を…

アアアアアアアアア
…………

つてまだいたんかい…？

「クツ…淳どの一体どうするんだ…？」

壮一郎さんが俺に聞いてきた。うへん…………確かにこの状況をどうやって打開しようと。じめりへ考えてみるとあることが思い浮かんだ。

「一ヤリ……

「よし、美雪……あれをやるぞ……」

俺の声を聞き美雪は一瞬驚いたがすぐに一ヤリと笑った。

「ええ、わかりました秋月さん……」

突然一ヤリと笑った俺達に美鈴や敏美に壮一郎さん達も驚いたがあえて無視してある作戦を開始した。

「よし美雪！……打ち合わせ通りに行くぞ！……

「わかりました！……秋月さん！……」

俺はブースターを開き加速した。

「それじゃ、弾幕を張ります！……」

そう言つと美雪がハウリングランチャーをEモードにして大量に発射した。そのビームに当たった奴らは次々と消滅していった

が更に俺が上からプラズマホーンを起動させながら降下しそのまま奴らを真っ二つにした。

「更に行きます！！」

いつの間にか奴らの後ろにいた美雪が今度はハウリングランチャーをBモードに切り替えて発射し奴らを次々と迎撃した。

「まだだつ！！」

俺がアヴァランチ・クレイモアを発射し奴らを次々と消滅させていった。そして一体だけ残った奴らに一気に加速しそいつの前までいきそして俺はリボルビング・バンカーを、美雪はハウリングランチャーをXモードに。

「美雪！――ここに撃ち込め！――！」

「これで終わりにします！！！」

俺が奴らにバンカーを撃ち込み上に向かた瞬間、美雪がそこにハウリングランチャーを発射しそのまま俺は上昇し美雪もそのまま降下した。

そのまま俺と美雪はぶつかりそうになる瞬間、すれ違つてそのまま奴らを倒していった。

「これが俺達の！！」

「切り札です！！」

そして俺と美雪は決め台詞を言った。

「ちよつ！？淳！？今の一體何つ！？」

あまりのことに慌てて敏美が俺に聞いてきた。

「ん？ ああ、あれはランページ・ゴーストって言って……」

俺はみんなに説明していくと壮一郎さんが俺のところへやつてきた。

「淳どの我々を助けてくれてありがとう」とう

「 いえ構いませんよ。俺は沙耶にあなた達を助けると言いましたから」

「 そうか……ではこのあとはどうするんだ?もし移動するならこのだけの人数をどうするんだ?」

「 確かにそうですね……まあ大丈夫ですけどね」

俺はすぐに支援補給マーカー（設置型）セットあるものを取り寄せた。俺の行動に美鈴達以外のみんなが不思議がつていると。

バババババババツ

突然のプロペラ音に壮一郎さん達が驚いたよつだ。

「 淳、来たよ」

敏美の指を指した方を向くとそこには「こちらに向かってくる一台の装甲車があつた。

「 淳どの、あれは……?」

「まあ、すぐにわかりますよ」

そういうしている内にそれが支援補給マーカー（設置型）が置いてあつた場所まで来るとバルーンが破裂して装甲車が落ちて來た。

バン!! シュルルルルル ドッ コーン!!!!

「……またすごい物を取り寄せたね」

ちなみに今回取り寄せたのは「AV-type C」という孝達が乗つていったストライクとは少し違う物だ。

「まあ、これで移動しましょう。ひとつの前に壮一郎さん達にはこれに着替え下さい」

俺は一緒に取り寄せたネオMOSS迷彩服をみんなに着替えるよう指示した。最初は避難民の人達はイヤがつたがこの服のことを説明するとみんなすぐに着替え始めた。

～しばらくお待ち下さい～

壮一郎さん達の着替えが終わりみんながインパルス（装甲車の名前で淳が命名）に乗り込んだ。中の広さに驚いたが何とかみんな入つてた。

「それじゃ淳君。もう出しても良いわよ

「了解。それじゃ行きます！」

ひつして俺達は高城邸を後にして

第十五話 警察署へ！－新たな生存者達（前書き）

LAV-t type Cの紹介です。

MSFが所有する装甲車でLAV-t type Gに戦車砲を付けた物。この装甲車も旧式だがMSFの技術により現在の装甲車を圧倒することができる。

武装

GNバルカン×2
GNミサイル×8
GNレールガン
GNビームキャノン（GNレールガンと切り替えて使う）
ソニック・ブレイカー発生装置×2

追加システム

GNドライブ
GNフィールド発生装置
GNジヤマー
PS装甲
ホバー走行

内部の広さ

二階建ての家が一件分に入るぐらい広い

第十五話 警察署へ！－新たな生存者達

俺達は高城邸を脱出してしばらくたつた後、話し合いでまず警察署へ行くことになった。その間に美雪が避難民や部下の人達に俺の素性とマザーベースのことを説明している。みんなが俺の正体を知った瞬間驚いたがマザーベースの話を聞いて嬉しそうな顔をしていた。すると運転していた俺の所に壮一郎さんがやつってきた。

「淳君、一つ聞きたいがそこの一人とあっちの娘は君の彼女なのか？」

「えっと…………」

「私達は…………」

「その…………」

突然の問いかけに美鈴達が顔を真っ赤にしていた。

「ええ、そうですよ。とゅうより三人共愛していますから

「…………ちゅう……淳……（秋月さん……）」「

俺の言つたこと三人共さつきより顔を真つ赤にしながら詰め寄つて來た。

「おつ、何だ何だ？兄ちゃんはモテモテだな」「ニヤニヤ

「なかなか良いカツプルじゃな」「ニヤニヤ

「アツアツだね」「ニヤニヤ

後ろで話を聞いていた部下の人達や避難民達がはやしてていた。

「はつはつはつは！……仲の良い四人だな！…」

壯一郎さんは盛大に笑つていた。

「……高城会長も笑わないで下を……」「

「いやあ、スマンスマン、だが恥ずかしがる」とはない。君達三人で彼を支えてやつてくれ

「 「 「 はい、はい……」

そんな話をしている内に床主警察署の近くまで来たが俺はある疑問を感じていた。

「何か変だな……」

「どうしたの？」

「いや……何でか知らないが自衛隊のブラックホークが墜落しているんだが」

どういつ訳か三機のブラックホークが床主警察署の近くに墜落していた。

「淳の旦那、もしかすると何かの任務でこの近くに来たときEPP攻撃を食らって墜落したんじゃ……」

「かも知れないな……それじゃちょっと見てき……「バン……バン……！」

突然の銃声が響き渡った。

「淳……今の銃声警察署の方から聞いたよ……。」

「もしかすると生存者かもしません……。」

敏美と美雪がそう言つてゐる間も銃声が聞こえてくる。

「ひつ……松戸さん……運転変わつてください……俺は美鈴達と先に行つて助けてきます……。」

「わかりやした……。」

俺は松戸さんにインパルスの運転を任せアーマーを装着して美鈴達と先に警察署へ向かつた。

(くそつ……無事でいてくれよ……。)

そして警察署の上空に到達すると下では自衛隊と思われる人達が奴らと戦つていた。

「何とか間に合つたね！」

悲鳴が聞こえたほうを見ると一人の女性隊員が奴らに襲われそうになっていた。

「ちい...ちいさなが...」

俺はGニアドライブから大量のGニア粒子を放出させそして。

「究極」～！～！ゲシュペンスト～！～！キツ～ク！～！」

そう言って 奴ら の顔面に蹴りを入れた。

淳サイトハンド

? ? ? ? サイト

私の名前は星井二沙大佐。^{ほしい みさ}陸上自衛隊レディース小隊の隊長をつとめている。生存者の救出と言う任務に勤めていたが任務中に突然へりが故障してしまい墜落してしまった。

「くつ、みんな大丈夫！？」

「ヒッちは全員無事です！」

「ヒッちは！でも何人か怪我をしているわ！」

私の呼びかけに全員答えてくれたが墜落のショックで何人か怪我をしたようだ。

「雨宮軍曹！ここから警察署

までどれくらいかかる？」

「はいっ！ここからだと数分の距離だと思います！」

「よし、それじゃ全員警察署へ向かうぞ！怪我人には手を貸せ

！」

私の指示でまず警察署へ向かった。しばらくして私達の部隊は何か警察署に着いた私達はまず怪我人の治療に当たった。

「誰かそこにある包帯取つて！？」

あちこちから声が聞こえる中私は無事な隊員と一緒に警察署内に生存者が居るか捜査をしていたが中は誰もいなかつた。

「大佐！！怪我人の治療完了しました！！」

「分かつたわ。それじゃ全員に休む様に言って……」

「アリ…！」

そして私に報告した隊員はみんなに休む様に言うために部屋を出
ていった。

「たぶん……」

「どうしたんですか星井大佐？」

私がため息を吐くと後ろから私と同期仲間でこの小隊の副隊長の千鶴奈央少尉が声をかけてきた。

「いやね……、世界がこんなになってしまった理由が分かんなくて……」

「ああ成る程。でも今はそんなことを言つてる暇はないでしょ？」

「うう……確かにそうだけど……「星井大佐！－千鶴少尉！－大変です！－」一体どうした！」

私達が話し合つていると一人の隊員が息を切らしながら部屋に入つてきた。

「化け物共がこちらに向かつてきています！－

「何ですつて！－？」

「くつ！－全隊員に通達！－化け物共を迎撃！－匹も中に入れるな

！－！」

私はすぐに隊員に指示を出しながら迎撃をしに行つた。それから5分後、現状はこつちが不離だつた。

「くつー・誰か弾持つてないーー！」

「くそーー来るな化け物ーー！」

何体か倒したが化け物共は減るどころか増える一方だった。このま
まじゃ全員やられてしまつ。一体どうするば……。

「ーー隊長後ろーー！」

「えつ？……！？」

私が考え事をしていると隊員の一人が私に声をあげた。後ろを振り
向くとそこにはあの化け物が私のすぐそばまで迫っていた。

「キヤアアアアアアーーーー！」

「」の距離じゃ逃げることが出来ず部下の方も援護する事が出来な
い。私は悲鳴を上げ助からないと思つた。

「星井大佐ーー！」

千鶴が私を助けようと銃を構えた瞬間。

「究極／＼！－！ゲシュペニスト／＼！－！キツ／＼ク！－！」

「えつ？」×全隊員

突然声が聞こえた瞬間物凄い音が聞こえ恐る恐る目を開けるとそこには赤いロボットだった。

星井サイトエンド

淳サイト

……ついノリでやってしまった（汗）。まあでもアルトは一応ゲシュペニストの改良型だから大丈夫…………だよね？つとその前に。

「ええと、大丈夫ですか？」

「……あ、ああ大丈夫だ……」

「そりですか……それじゃあこいつは俺達が援護しますんで後退してくださー」

「え？」

隊長と思われる人は訳が分からないと言つた顔をするが俺は 奴らの方を向いた。

「それじゃ、行きますか！－美鈴！－敏美！－美雪！－行くぞ！－！」

「「「分かつた！－」」

そして俺達は 奴ら に攻撃を開始した。

淳サイトエンジ

星井サイト

「す、す、す、す……」

私は自分の目を疑つた。突然現れた謎のロボットは上空にいる仲間と思われるロボットに指示を出しながら圧倒的力での化け物共を倒していく。

「た、隊長あの口ボットは一体……？」

「私も知らない。一体何なの？」

すると突然、赤いロボットの肩のハッチが開いた瞬間。

「これだけのクレイモア弾、貴様に見極めるか！？」

そこから大量の何かを発射し化け物が一瞬で消滅した。

「スタッグビートル・クラッシャー！！！」

グワシャツ！！！

青いロボットは右手に装備されたハサミのような物で化け物を真つ一つにした。

「行つて！－！チャクラム・シューター－！－！」

「キュイイイイイ－！－！－！」

「ズバッ－！」

黒いロボットの方は左手から何かが出てきて化け物の頭を切った。

「ハウリングランチャ－、Eモード発射！－！－！」

「ズキュキュキュキュ－！－！」

「ドッコーン－！－！－！」

もう一体の青いロボットが大量に見えそこからビームのような物発射していた。

「一体何なの？」

「隊長！－！あれを！－！」

一人の隊員の指を指す方を見るとそこには一台の装甲車がこっちに向かって来ていた。その装甲車からミサイルやレールガンと思われる物を発射し攻撃を開始していた。それから数分後化け物共は一体も居なくなつた。

（あのロボットは一体何なの？とにかく助けてくれた礼がないしなうと……）

そう思いながら私は隊長と思われる赤いロボットの方へ向かつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2048w/>

学園黙示録と古しえの鉄の巨人

2011年10月8日17時43分発行